新世界の車窓から

take12345

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新世界の車窓から

【Ｎコード】
Ｎ９８２４Ｚ

【作者名】
ｔａｋｅ１２３４５

【あらすじ】
Ａ列車のファンタジー版という感じです。
主人公は列車や線路を出す魔法が使えます。
開拓や人々の手助けをして、いろんな亜人種達を取り込んでいきます。

■０１　おわり■

あと数日で隕石群が地球に衝突することが分かり、
すでにいくつかの小規模隕石が世界中に降り注いでいた。

世界中で暴動が発生する中、ある夜眠っている人たちの夢に天啓が下った。
それは、「選ばれし１２人がそれぞれ別世界を創造し、そこへ行けば人間は助かる」というもの。

それを知らせてくれたのは、人によって姿が全然違い
あるいは声だけの場合もあったが、総じて事実だと直感した。
目覚める直前その１２名の顔が浮かび上がった。

翌朝、世界はこの事で更なる混乱に陥った。
昨晩眠った人は全てこの夢を見たからだ。
人類存亡の危機なのだから必死だった。
ほどなく１２人全員見つかった。

英語圏から３名
アラブ圏から１名
ロシアから１名
中国から２名
インドから２名
韓国から１名
日本から２名

選ばれし１２名はこの別世界に関して心当たりがあった。
彼らは、この啓示がなければ身近な人だけをつれて旅立つ予定だっ

たのだ。

なぜなら、彼らはこの世界へ何度か行き来し、
選ばれし１２名の内何人かは少人数が生活する程度には整えて自らの別荘のように扱っていたのだ。
しかし、大勢が暮らせるほど整えられていなかった。

それならば、これから整えればいいと考えられるかもしれないが、
選ばれし１２名が創りし世界へはゲートを通らねばならない。
そして非常に厄介な事に動物以外が通過することができないのだ。

何一つ持ち込めない。
食糧どころか、服すら不可能で、
通過するには裸で通らなければならなかった。

さらに厄介なことに、本人以外の一度通過した生物は二度と出る事ができなかった。

その為、それまで軽々しく他人を呼ぶ事はできなく、
創造者が個人的に楽しむに留まっていた。

１２人は新しい世界の創造者であり、わたる先の世界はもともと存在する別の何処かでは無かった。
その為、それぞれ全く違う風土、地形、さらには支配する法則が違っている。
なぜならそれらの世界は創造者の知識と夢と無意識が創りだしたモノだからである。
人類が積み重ねてきた英知が通用しない可能性が大きい。
元始的なものなら幾らか通用するであろうが。

当然、創造者と同じ言語を扱える人が殺到する。
しかし、人種の保存のため、
多様な人種を幾らか分散させようという知識階級者達の勝手な取り決めもあった。

全世界放送により、創造者達がテレビで自分たちの創りだした世界についての解説を懇願された。
解説した内容は驚くぐらい全く違う地形、世界を示していた。
みんなゲート付近の地形しか知らない為、実際の所、同じような場所があるのかもしれないが。

ある者は、見渡す限り砂漠で、ゲートから１ｋｍ圏内に巨大なオアシスがある。
ある者は、熱帯雨林で、無数の大河が確認され、地球に存在しない生物がいる。
ある者は、空に浮かんだいくつもの島の一つにゲートが現れた。
ある者は、サバンナのような平原が広がっていた。
などである。

そして共通するのがどの世界でも彼ら創造者は絶対者と呼んで差し支えない存在になっている事である。
その世界における彼らは、怪我することも飢えることも老いる事もないという。

日本の創造者の１人である小森正平（こもり しょうへい）の世界は、ゲートから出ると林程度のあまり深くない森が続いていた。
少し行くと美しい清水の湧く岩場がある。さらに先にはなんと、ファンタジーで有名なエルフの集落があった。

正平は、彼らの言葉が分かり、彼らも正平が世界の創造者と気付いたらしかった。
すぐに打ち解け、自分で創ったはずなのにどういう世界なのか分からない正平に、
世界について彼らが知っている事を教えてくれた。

そして驚くべきことに、魔法が存在したのだった。
エルフは歓迎の証に貴重な魔石を分けてくれた。これは魔法を習得するための希少な鉱石だった。
これにより、正平は３つの魔法が使えるようになった。

創造者たちの解説はどれも驚くべきものだったが、
正平の創造した世界の解説がもっとも世界を驚かせたであろうことは疑いなかった。

他の世界ももっと調べる事ができるなら、それ以上に不思議な可能性は当然あるが、
分かっている段階でここまで突拍子もないのは正平の世界だけだった為である。

数百本のマイクとカメラ、それに大量の同時通訳。
それぞれの創造者の活動拠点近くに急遽作られたスタジオ。
すでに、かれら創造者と懇意になろうと王族や、各国首脳が近くに陣取っている。

あの天啓の下った次の朝は、家の前に大勢の人だかりがあったのを今でも鮮明に覚えている。
どれもこれも必死に押しかけ、創造者達は自らの命の危機を感じ取るほどだ。

だが、すぐに警察、そして自衛隊が駆け付け、正平の守備にあたった。

ほどなく、世界各国は創造者達から世界の特徴、一度はいれば二度と出れない事、
裸一貫でしか入れないこと、さらに創造者ごとに世界が違う事などを聞いた。

人々はどの世界に行くべきか、それを創造者に創った世界を紹介してもらい、
人々に選ばせるという方策をとった。

創造者が世界各国奇麗にばらけた為に、悩むまでもなく自らの近くに住んでいた創造者のところを
選ぶのがほとんどであった。

世界滅亡までもう僅かな時間しか存在せず、小規模の隕石が絶え間なく降り注いでおり、
ところどころ交通も麻痺しているため、選択の余地もあまりなかった。
それに、恐らくは創造者が使う言語が新天地での標準語になるのはほぼ確実である。

しかし、それでも偏りは存在した。
ゲート付近が砂漠や、寒冷地の世界は不安であったため、人気が少なく、
逆に正平の世界は、すでに飲み水が確保でき、
さらに先住民が居ると言う事が分かっていたためにずば抜けた人気があった。

もう一人の日本出身の創造者である佐々木玲子(ささき れいこ)も自分の世界より正平の世界へ行きたがっていた。
彼女の世界は、美しいが、険しい山の頂にゲートが出来た為、探索した範囲で生活するには
とても厳しいことが確定していた。

正平の世界はほとんどの人がファンタジーの世界を想像した。
その為、発展すれば今の世界よりも良くなるのでは？という予想を立てる人も少なくなかった。
実際、一番夢のある世界と言えた。
他の世界ももう少し探索すれば、そういうものを発見できたかもしれないが、
現状それを確認できたのは正平だけであった。

１２人の放送が終わった後も、チャンネルごとに創造者のインタビューがループして流れており、
時折その世界の解説が挟まれた。

放送終了後から、正平の家、街、には大勢の日本人、いや世界から来た人でひしめき合った。

ゲートは何度も開閉することはできない。
一度開くと次に開く事が出来るのは数日後だという。

創造者の1人がいろいろ実験して詳しくわかった一つの事実がある。
ゲートは、一度に最大5時間程度しか出現させられず、連続で5時間開けた場合およそ2週間の
インターバルが必要だということである。
2週間後では、地球からほとんどの生物が絶滅しているのは疑いなかった。

ゲートの大きさは、精々家の扉程度の大きさ。同時に通過するにも2人が限度。
それが、絶え間なく5時間開けっぱなしでも通過できる人数に限りがあるのは明白であった。
そのため分散することを呼びかけた。

ゲートのオープンは、世界同時に行われることとなった。
正平の周りには、家族、親戚、同級生、親の会社の同僚。そしてそれらの知り合いと
正平の知り合いの知り合いで溢れかえった。

正平に限らず世界中の創造者の周りはそうなっているであろう。
さらには、正平には世界の富豪や王族がたくさん押し詰めていた。

彼らは、既に日本語の勉強を必死ではじめている。
生物なら通れるということで、次の世界で食糧となるべく家畜の手配もしていた。

わざわざ自分の文化圏を選ばずに正平を選んだ辺りは、彼らの勘がそうさせたのだろう。
選ぶ基準は世界だけではない。創造者の人格もまた基準であった。
なぜなら、創造者達は彼らの創った世界においては、
夢の内容から不老不死など特別な力を有しているらしい。
それはつまり彼らがそれぞれの世界で頂点に立つことを意味している。
ならば、この最初で最後の君主を選ぶ機会に妥協は許されなかった。

ゲート作成予定地の広場には、動く歩道が設置され、馬、牛、羊、鶏と

最も人類のノウハウが蓄積された家畜が揃えられた。
植物の類がゲートを通過できない為に、当面の食糧としても非常に重要であった。

もちろん、世界１２か所のゲート予定地にも同じように家畜がスタンバイしている。
食糧は現地で調達する物以外は生きた家畜のみである。
現地で個々人が探索した範囲ですぐに食糧を調達できそうなのは、正平を入れて６人だけであった。
他にも、ゲートを出た先では丸裸な為、羊の毛がとても重要な意味を持つ。

有識者の間では、カルネアデスの板計画と呼ばれていた。
なぜなら、結局５時間ではいれる人数は、どう工夫しても全人類には及ばず、
又、丸裸の状態から安定した食糧も無しに全員が生き残れるはずがなかった。

なので、実際にはゲートは数回にわたって、開かれ、
先遣隊は実験的な意味合いで送られると一般的には知らされていた。

しかし、現実には連続５時間の１度こっきりである。
聡い人、創造者に近しい人、ずば抜けて偉い、いや偉かった人たちだけが知っている。
他にも、家畜の世話に長けた人、炭焼きや昔ながらの農業を営んでいる人々、
現代の科学技術に依存しない技術を有するある意味で元始的な生活が幾らか可能そうな人たちが優先されていた。

持っていける物は、生き物と知識だけ。先遣隊に対してサバイバル講習が行われ、
何もない状態でも最低限生きるのに必要な知識が共有されていった。

パソコンどころか本もノートも持ち運べない為に、家畜や人間の体に文字を書く。
しかし、これらはゲートを通ると消えてしまうのだが…。

そんな準備が１２か所で行われ。運命の時間がやってきた。
向こうへ行けばしばらく食事が出来ないだろうことから、この世界で最後の食事をお腹いっぱい食べていた。

空は、無数の小さな隕石で昼間だと言うのに彼方此方で大気圏で燃え尽きる光を確認できる。
あるいは燃え尽きず、遠くの方で大爆発を起こした音が耳に届く。
もう一刻の猶予もない。

みな、一斉に服を脱ぎだした。下着も脱ぎ皆すっぽんぽんだ。
秋が過ぎ冬に差し掛かろうとしている為非常に寒い。
老若男女すべて。恥かしいなんて言っていられない。
生死どころか人類存亡の危機なのだから。

虹色の厚さ1ミリにも満たない長方形のゲートが出現した。
同時に歩道は動き出す。
先頭には、正平と、その家族、正平が予め部下として選んだ者達、学校の友達、近所の人たち、会社の人たち、その知り合い、家畜と酪農の技術を持つ者達、王族に権力者、サバイバル技能の保持者、そして正平を選んだ世界の人たち。
そのような順番でゲートに入って行った。

元の世界でゲートの外の事について知っているのは当然正平だけである。
なので、一番初めに入り、次々に出てくる者たちを案内する必要があった。

家族が出てきた次に出てくるのは、正平をサポートする者たち。
彼らも初めて世界に踏み込むのだが、いろいろ正平から出た先のことを聞いており、
すぐに正平の手助けが、出来るようになっていた。
彼らはこれ以降も死ぬまで正平の部下として働く事が決定づけられていた。

正平は元より、出てきた家族もみんな素っ裸であった。
しかし、予め正平の服だけは用意されていた。

エルフの編んだ服である。
正平以外の分は無い。頼めばあるが、エルフにとって正平以外はどうでもいいどころか侵略者である。
この世界では、正平とそれ以外は大きな隔絶が存在する。
それには、みなおいおい気づくのだが、このときはまだ誰も知らない。

まず、すぐに家族をゲートから引き離し、少し先にある広場に待機するように言った。
すぐに、正平をサポートする人１０名。通称近衛隊が入り、ゲート付近に５名待機し、
誘導場所を確認するために残り５名が走った。

正平の関係者をまず正平の家族を誘導した付近に全員集め、

次に家畜を予め決めておいた低地へ誘導した。
そして次々に侵入してくる人々を各エリアが大体１００人超える毎に時計回りに誘導先を変え、
１００人集まった集団はその場から離れて次の１００人がその場へスムーズに行けるようにする。

これが５時間ぶっ通しで行われた。
続々と裸の人間が詰めかける。

そして５時間後ゲートは閉じる。
予め通過できる人数を計算し余裕を持って選ばれていたために、
ゲートが閉じる数分前に侵入する人間の列は途切れた。

しかし、鋭い感を持った数名がゲートの閉じる直前に滑り込んできた。
ただ見物しに来た大勢の人の内数名かがそれをみて、最後のチャンスを逃したことに気付いた。
しかし、もう二度と地球上でゲートが開かれることは無かった。

■０２　そこから新しい文明が始まった■

正平の周囲３ｍから周りを取り囲むように人垣ができた。
正平の世界を選んだ人たちだ。
その数実に８万人。
７万人ほどが日本人で、あとはそれ以外の人達である。

日本以外の人々は総じてそのファンタジックな世界に惹かれてきた人々だ。
それも、一刻も早くその世界を見たいという種類の人たちであった。
しかし、その趣向が彼らを滅亡の危機から救ったのだった。

正平の周りにはいまだ裸の状態の人々がこちらに視線を向けている。
その光景は一種異様で、中学２年生である正平には恥ずかしいものだったが
それよりも大勢の人から注目される状況からくる緊張感の方が上回っていた。

正平はこの世界を選んでくれた人々に感謝と、励ましの言葉を送った。
それは、中学２年生にしてはなかなか立派な挨拶で、近衛の人から徐々に拍手の波が広がって行った。

正平の習得した魔法は３つ。実はかなり実用的なものだった。
魔法がどのようなものかは実は誰もしらない。

＜列車・顕現＞　ＭＰ２０００／１車両
＜レール・顕現＞　ＭＰ２５／１ｍ
＜駅・顕現＞　ＭＰ９０００／１駅

正平の最大値　　ＭＰ５０００００（半日で全回復する。ただし精神力の消耗は別）
人間の最大値　　ＭＰ１０

これを魔法と言っていいのか、これが出来た所で魔法の世界と言えるのか難しいところである。
しかし、エルフ達に見せてもらった魔法は炎を出したり、植物のつるを操ったりと
非常にファンタジーなものだった。

とにかく魔法を発動することにした。
大衆が見守る中それが行われる。
まずは、レール。
二本の鉄のレールが出現し、その下に石の敷物と大きな砂利が敷かれていた。

正平が手をかざした先へグングン真っ直ぐに伸びていき、途中塞いでいた木は消滅し、
丘に沿って伸びること無く、丘自体も消滅し、渓には鉄橋がかかり、
山はトンネルが掘られた。
完全に真っ直ぐ伸びるため先が見えるのだが、あまりにも先の方まで伸びたために
最終地点がとうとう見えなくなった。
実際は見えなくなったところで魔法の効果が届かなくなっていた。

それを見ていた大衆からはどよめきが上がった。
予め、この列車関連の魔法しか使えないと最初の挨拶で説明していたのだが、
かつての地球で、いったん文明がリセットされると何度も喧伝されていたため

（ぎりぎりまで文明を味わい、最初で最後の先遣組に志願させない為でもあったのだが）
少なくとも自分の代で、もう文明に触れるのは不可能と思っていた人々は
見慣れた文明の一端を垣間見、大きな希望と、正平を選んだ自分の選択眼の正しさに
喜びを抑えられなかった。

レールは隣にももう一つ設置し、上下線分設置した。
あとで、増やすと面倒な為に最初から2本設置することにしたのだった。

そして次に駅を出現させた。
大した造りでは無かったが、0からスタートする人々にとってはこれ以上ない拠点と言えよう。

改札などの機械的なものは一切なく、ただ、向こうのホームまで続く階段と通路があり、
とうぶん雨風を凌ぐためには十分と言える。
駅が出現した時にわざわざレールも4本に分岐されていた。
これは、駅に停車する列車と通過する列車の為のものだ。

そして、最後に列車である。
レールの上に、ブルートレインのような列車が出現した。
これには、本当に大きな歓声が上がった。

なぜなら、その列車で暮らせるのだから。
中は、すべて寝台が設置されており、いきなり近代レベルで寝泊まりできるスペースが出現したのだ。
その後も次々と列車を出現させていく。

全てに動力はついているようだが、運転席のある車両だけが操縦できる。

もとの世界の列車のように電力で走るというわけではなく、どうやら魔力を消費して走るらしかった。
大容量をもつ魔力バッテリーが内臓されており、正平は魔力を満タンまで補充できた。

１０両編成が完成するごとに、裸の人々を中へ入れて、操縦方法を教え少し先の方まで運転させた。
一つのベッドに最低でも２人以上乗ってもらい、早い段階で全員にいきわたらせるようにした。
ベッドには掛け布団があり、衣類の代わりに利用した。

正平は、何度かこの魔法を使っており、ゲートからはかなり遠い場所で
この魔法を試していた。
それで、なんとなく気にいらなかったのですぐに消滅させた。
同じ魔法で消滅させる事もできたのだ。

ちなみに、この世界では生物はだれしもＭＰを持っている。
ただし、才能のように個人差があり、人間は平均して１０ぐらいであった。
そしてこの力は１２時間で全回復するらしい。

正平のＭＰは現在５０万ぐらいである。それは彼がもはや人間ではなく創造神であると言う事の査証といえた。

正平自信も未探索の領域にレールを掛け、一番最初に創った車両に乗り込み、どんな地形か見て回ることにした。

ある程度離れたところで、大きな湖の近くに来た。
水も奇麗で飲めそうなので、そこを拠点にすべく2つ目の駅を造った。

そしてまたしばらく行ったところで、広い沼地が広がっていた。
近くに稲のような植物が生えていた。
ひょっとすると元の世界の物と同じよな物で食糧となる穀物かもしれない。
そういう期待もこめて、3つ目の駅を設置した。

次に鉄橋を渡り、トンネルに入った。中は光源がない為真っ暗だった。
そのまま結構な距離を通過し抜けた先は、左手に巨大な湖、ひょっとしたら海かもしれない
水平線が見えるほどの巨大な水たまりが広がっていた。

魚介類が調達できるかも知れない。
トンネルを抜けてしばらく砂浜が伸び岩場に差し掛かったところに4つ目の駅を造った。

さらに先へ行くと、水たまりが突如終わり、草原が広がっていた。
家畜を飼うには非常に良さそうなところだ。
もう少ししたところで、レールは終わっておりここら辺に5つ目の駅を造って
今回はここで終わる事にした。

それぞれ

1、始まりの駅
2、美しい湖の駅

3、稲穂の駅
4、海の駅
5、草原の駅

と名付けた。

草原の駅に8万人全てを集めて、今後の方針を決める事にした。
草原の駅には駅を設置する直前にレールを並列に複数置いた為、
出来た駅はかなり巨大なものになっていた。

家畜用に出した、消費する魔力を抑えることで造り出せる貨物列車に収容し
すでに放牧を開始していた。
そこら中に生えている草をちゃんと食べていた。

住む場所も重要だが、もっとも重要なのは、水と食料であった。
水は問題なさそうだが、食糧の調達が目下の急務である。

家畜は食糧として大量に消費されることが予想されていたために、
かなり多めに持ってきていた。
それでも、8万人もいればそれほど持たないことは目に見えていたし、
食糧の現地調達か可能かどうかも不明なので増やしたかった。

海の駅の近くの広大な水たまりは塩分を含んでおり、暫定的に海とした。
湖は真水であったために、これを飲み水とした。

今のところ、飲み水が調達できるのは、始まりの駅の清水と、美しい湖の駅の湖だけである。

ここを拠点とし周囲の探索をすることが決まった。

服は、ブルートレインにあった掛け布団を体に巻くようにして使った。

これらは、居住区が列車や駅から外れた人、探索の任務を帯びた人に優先的に充てられた。

他の人は葉っぱと蔓を使って局部だけでも隠せるようにした。

そして、刃物として使えそうなモノが見つかり次第、羊の毛から服を作る予定である。

エルフの居住区を知っているのは、まだ正平だけである。

これは正平がエルフと連れてきた人間両方に配慮した為である。

エルフとの交流で知ったことは、出会えば多分人間が殺されるだろうと予想してのことだ。

正平の言う事はたしかに聞くが、厄介事になるのは目に見えていた。

正平は、＜列車・顕現＞の魔法を重ねがけすることでいろんな種類の列車が出せることに気付いた。

それにより、タンクを積んだ車両が出せた。これで、水を吸入し、水の調達が面倒な遠隔地にも

拠点を置く事ができるようになった。

家畜を消費しない、鶏の卵は非常に貴重な食糧元であった。

出現させたレールなどを駆使して、フライパンのようなものを造りそこで卵を焼き

僅かずつを全員に配った。

牛の乳も重要な栄養源となった。

早急に現地で調達できる食糧を見つけなければならない。

野生の動物に、魚、自然になっている果物なんかをまずは見つける必要があった。

海で魚介類を食べられる魚介類を調達する班を１組１０人、１００班。

かれらは先に森へ行き、道具の調達した。

サバイバル経験者を１班に最低１人を組み込ませ行動を開始した。

次に、自然に生えている果物の調査、生態学者をそれぞれの駅の１人づつ配置した。

そして、それぞれの駅から、森の方へ目印を付けつつ食べれそうなモノを見つける探検に出かけた。

どの駅からも１０班ずつこちらもサバイバル経験者を最低１人入れて出発だ。

次に岩場から刃物の代わりになりそうな石を調達する班が３組。

葉っぱを束ねて服を造る班を２０組。

燃料の薪を調達する班を１０組。

試験的に居住区を造る班を全ての駅にそれぞれ２組ずつ。

あとは、家畜を見張る班に、その他の雑用や取り決めをする班などに分かれた。

組織図も正平を頂点に、サバイバル経験者やもともとの指導者であったものなどが

比較的ヒエラルキーの上層に来るように配置した。

班のトップである１０人長、それをまとめる１００人長、さらに上に１０００人長

そして、近衛が事実上の１００００人長という感じである。

ただし、今のところそれぞれの長が１０人に指示を出しまた１０人

に指示を出すと言うだけである。
近衛は１０人居るために、７人が１００００人長、３人が正平の直接のサポーターである。

正平の家族だけが組織図から外れていた。サポーターの近衛１人が彼らをまとめてくれている。
１００人グループの中になるべく一家族が収まるように配慮された。
しかし、１班ごとにやる事が決まっており、なるべく作業に沿った人選がなされる為
１班に１家族が収まる事は滅多になかった。

一時的な住居として１０班、つまり１００人ごとに１車両を占領した。
あぶれた班は、駅の屋根のあるスペース。それでも無理な場合はとりあえずホームである。

草原の駅は全ての車両が収容できるように造った為に、建物部分が大きく、かなりの人数が収容できた。
駅から東へ行ったところに川が発見された為に、いよいよ人類の拠点としての色合いが強まってきた。

線路や列車をじゃんじゃん追加したいところなのだが、
魔力を消費するとき同時に精神力のようなものも消費するらしく、
そうそう連続で出来ない事が判明した。

恐らく何度か使う内に慣れるのだろうが、消耗する精神が及ぼす苦痛は、
少なくとも普通の人間が死ぬレベルである。

刃物がなければ家畜の解体も一苦労である。それどころか殺すこと

すらままならない。
最初皆が口にできたものは、海で取れた海藻と小さな蟹に二枚貝、
いくつかの探索隊が見つけてきた果物だけであった。

それらはあえて全体で分けるようなことはせずに、１０００人ごと
のグループで分けることにした。
そして、それらを物々交換で他の物と交換できるという形をとった。
これによりある程度の成果主義をとるものとした。

食糧の調達班の割合が少ないグループが不利になってしまうために、
取れたものの何割かを徴収し、
それらを調達班の少ないグループへ割合に応じて還元した。

貨幣の代わりになるものを探した。
とりあえず人類の歴史に倣って貝殻で代用することにした。

家畜はとりあえず正平の所有物とし、飼育員も特別な１０００人の
グループに振り分けた。

やはりまともな服がないのは致命的な問題だった。
鋭利の葉で傷だらけになる人、擦り傷からたちまち破傷風に掛かる
人、
服が人類にもたらした恩恵の大きさを噛みしめさせられた。

正平はエルフの集落へ赴き機織り機を譲ってもらうことを提案した。
しかし、世界の創造者たる正平は人間もエルフも対等で同じぐらい
大切に感じていた為に、
ただ譲って貰うということに強い抵抗感を感じた。

よって、連れてきた家畜とその技術者の派遣を交換条件に提示した。

エルフは、承諾し、鶏の１０羽と交換するという約束をしてくれた。
草原にそれぞれ出来つつある粗末な柵の囲いの一つから管理者にこの事を伝え、
技術者１人と供に鶏１０羽を持ちだし列車で始まりの駅まで運んだ。
そこで初めてエルフは正平以外の人間を見た。正平が間に入らなければ
その粗末な姿に脆弱な魔力、弱そうな躯体に確実に殺すほどの生物的な差を感じたが
正平という絶対者の頼みでしかも公平な条件に承諾した。
それでも、エルフの活動領域に正平と伴わず許可なく侵入した場合は、
命の保証は無いということを伝えた。
正平は、仕方がないと現状のエルフと人間の生物的、文化的な格の違いが理解できている為に承諾した。

その事を伴った近衛に伝えた。
エルフと人間の使う言葉は違った。
正平はエルフの言葉は分かるし、エルフも正平の言葉が分かったが、どちらも言葉に魔力を持たせ単なる記号付けの音でなく、力を持った言霊として会話出来る為に
日本語で石と言っても水のつもりで発声すればそのように伝わるのだ。

それでもエルフは普段はエルフの言葉でしゃべっている。
しかし、感の鋭いエルフは相手が必死に伝えようとすれば、元の世界で違う言語を操る者同士の
ジェスチャーを交えた会話よりもよほど理解が早かった。

正平と1人の技術者と鶏１０羽による初めての人間とエルフの交流を記念してささやかな宴が行われた。
食べるものは薄味で濃いものになれた人間の舌には物足りなさを感じすることもあったが、
この世界へきてまともな食糧がなかなか手に入らず腹をすかしていた技術者と
近衛達は久しぶりの満腹感に頬と涙腺が僅かばかり緩んだ。

技術者は自らの使命の重大さを十分理解していた。この世界で、いや人類史上初めての
人類以外との交流となるのだ。
ちなみに正平はもはや人間とは言えない。出自が人間の人間に味方してくれる創造神である。

技術者とエルフの交流が上手くいけば次の段階である物々交換を始めたいと思っていた。
まだ、試験的に代用通貨として海に落ちていた奇麗な貝殻の運用を始めているが、
まだ物々交換が主流だし、エルフ自体が物々交換を行っていた為、
最初の市場で行われるのは物々交換が主流となるだろう。

宴を終えて一晩泊まり、帰りには機織り機を運ぶ近衛と、
その使用方法を伝えるべく遣わされた美しいエルフを1人伴って始まりの駅にやってきた。

どの駅にも何人かの人が常駐しているし、駅を拠点に探索を行っている。
始まりの駅は、エルフの集落に一番近い為に、予め探索範囲を制限している。

その為に常駐する人数は他の駅よりも少ないが、それでも人は居た。
エルフを初めて見る人々はその美しさに目を奪われ、みな恭しく挨拶を交わした。
言葉はわからなくてもエルフはそれが友好的なものであることは理解した為にほほ笑みで返した。

しばらくして列車がやってきた。話に聞いていた正平の魔法で顕現したモノだ。
エルフは、その巨大さ、纏う魔力の膨大さに正平の偉大さを感じた。
人間なぞよりも自分たちの指導者になって欲しいと思い、人間に嫉妬を感じた。

正平一行は列車に乗り込むと一気に5つ目の駅「草原の駅」まで列車を走らせた。
窓から見える景色にエルフは楽しそうにはしゃいだ。

エルフは、元の世界では人間達がこれを造っていたと聞き、人間の評価を数段階引き上げた。
エルフは、人間を大事にする正平の意図を理解したのだった。

正平の乗る列車は他の列車とデザインが違う。
黒い外装に金色の模様で装飾されており、あたかも王の専用列車のような風体である。

内装も豪華で高級なホテルを思わせた。
製作に掛かる魔力も通常の十数倍かかる。
この列車は現在2車両だけ製作されており、
ロビーと食堂用の車両、寝泊まりするための車両となっている。

現在正平以外では家族が許可なく利用する事を許されている。
そして通常は、正平とその許しを得てお供する者だけが乗車を許された。

この技術者の交換と機織り機と鶏の交換は８万人の全ての人間に知らせていた。
それぞれ拠点とする駅に集まり、正平とエルフの乗った列車を歓迎しようとホームに多くの人が
詰めかけていた。

窓を開け正平とエルフは人々に手を振りそれに答えた。
エルフも友好的な振る舞いをする彼らに少なからぬ好感を抱いた。
それと同時に粗末な葉っぱでできた服を見て、哀れに感じた。
エルフはしっかり技術を伝えようと決めた。

エルフの名前を日本語や英語で表現するのは難しい。
そのため、近い音を拾いニエルと名載ってもらうことにした。
正平が付けた名をニエルは気に入ってくれた。

草原の駅につき、たくさんの人に囲まれて粗末な食事によるささやかな宴を行った。
翌日から機織りの指導が始まる。
岩場から刃物に変わる堅く鋭利な刃物を多く調達されていたが、
エルフから特別に鉄製のナイフを下賜され、それを使って羊の毛を狩りだした。

羊の毛でもエルフを利用する野獣の毛の代用が十分可能だった。
羊毛関連の技術者が集まり、どんどん毛が狩られ羊毛が集まって行く。
折り機の技術者達はエルフから機織りの技術をどんどん習得してい

った。

僅か数時間でほとんど習得してしまった人間の技術者達を見て、
彼らが高い知性を持った生物であると理解した。

エルフはあまり情報を提供したがらない。聞かれれば答える事もある程度である。
そんなエルフが貴重で重要な重大な情報を齎(もたら)した。

なんと、エルフ以外にも亜人種族がいるらしい。
ほとんど交流はないが、彼らの造るものの出来が非常に良い為に、
閉鎖的なエルフをして極たまに物々交換をするという。

鉄製のナイフも彼らが製作したものだった。
その種族の特徴を聞く限りそれはドワーフだった。
そして、エルフがその種族を口にした時、予想通りドワーフのイメージが言葉とともに流れてきた。

正平がこの世界で最初から知っていた種族はエルフだけである。
エルフにも話す内容に好き嫌いがあり、エルフや自然、地形や魔法とあまり関係ないことを話すのが
好きでなさそうだったため、他種族の事は聞いた事が無かった。

しかし、道具がどうやって造られたのかその調達方法に話が及んだ時にこの事実が発覚したのだ。
すぐさまドワーフと交流を持つべきという意見が出た。

当然正平が介入すれば、交流が成立するであろう。
ドワーフといえば有能な鉱山技術者であり、又有能な鍛冶師である。

金属が人類にもたらした恩恵は凄まじい。

列車とレールは見た目には金属なのだが、金属製の他の用途で利用すると暫くしてぼろぼろになる。
どうやら決まった用途で出された魔法は用途から外れると魔法の効果が弱まりやがて消えてしまうようだ。
その為どうしても現地で採集できる金属とその製品が欲しかった。

ニエルによると、旅のエルフは草原の何処かに忽然と鉱山がありそこに集落を形成しているらしい。
旅をする変わり者のエルフが齎した情報だという。

草原はかなり広かったが、丁度線路を伸ばしている遥かな先に僅かな地形の変化が見て取れる。
ひょっとしたら、それが件の鉱山かもしれない。
早々、線路を伸ばすことに決めた。

機織り機による服の製作は日産１０着程度である。
装備した人間の活動力は飛躍的に向上した。
機織り機は交代で休むことなく織り続けられた。

平行して、絞めた家畜の皮を利用し靴を製作した。

現在家畜はおよそ

鶏２０００羽
羊１０００頭
牛２５０頭
馬１００頭

である。

あぶみ無しで馬に乗る事は困難である。
最近ようやくそれに耐えうるものが造られ始めた。
乗馬も徐々になされていく予定である。

草原には、遠方に敷いたレールと並行して川が流れていた。
ここから飲み水を調達しつつ、近くに畑の製作が検討し始められていた。
まともな農具はなく、木片を使った効率の悪い仕事であるが、
徐々に畑らしいものが出来始めると、それを見る者全てに大きな希望をもたらした。

食べる事のできる作物をいくつかエルフに聞く事が出来た。
それらを森から採取し、食糧にしつつ一部を畑に植えかえる。
種が採取できれば残らず耕して空気を含むフワッとした土に埋め込んでいった。

果物のなる木もいくつか発見された。どれも見たこと無い形状をしている。
味はどれも薄く酸っぱく僅かな甘みがある。そしてとても匂いがする。

品種改良されたものになれた現代人にとってはおいしいと感じにくいものだが、
現地で採れる貴重な食糧であった。

非常に温暖ですごしやすい気候であったが、抗生物質も薬もない世界では
家畜も人も抵抗力の弱いものから順に死んでいった。

ある程度覚悟していたことだが、順当に老人から亡くなっていく。
人々の価値観も徐々に変わり世界に慣れ始める。
死が当たり前の物として身近にある事をだれしもが実感していた。

野獣が出没する。
大した装備を持たない人々は簡単に犠牲になる。
家畜も目を離すと一気にやられることがあった。

正平が草原の駅付近に居る間は、
その膨大な魔力の気配に野獣は近寄らず被害はほとんど無かったが、
しばらく別のエリアで滞在すると一気にやられた。

柵が完成するまでは正平になるべく草原の駅付近を拠点に動くようにした。

■03　ドワーフ■

正平は、遠方に見える隆起を目指して線路を延ばすことに決めた。
強力な魔力の波動が正平を中心に台風のような規模で拡大していった。
辺りを伺う野獣達はその異常な力に慄き、遠方までその身を後退させた。
次に、線路の延長線上に魔力が流れ始めた。
それはあたかも大雨が降ったあとの川の濁流のように。
やがて、草原の駅で終わっていた幾股にも分岐した線路は2本に集約され、
そのまま遠方へ伸びていった。

魔力には余裕があったが、同時に精神力を消耗し、軽いめまいを起こした。
ただ、正平だからめまいで済むのであって、普通の生物ならたとえその魔力を持っていたとしても
発動後は発狂し死ぬレベルである。

黒字に金の模様を纏った二両の正平専用電車で出来たばかりの線路を走り始めた。
中に乗るのは、正平と近衛の3人である。

ちなみに、正平の家族は両親に妹1人だけで、新しく造ったＶＩＰ車両で暮らしている。
ＶＩＰ車両は1日1台だけ造り、有益な発見や大きな成果を上げた者を優先してあてがうことにしている。
家族と近衛以外は1週間限定としている。

ＶＩＰ車両はブルーの外装で全ての駅に１台設置され、残りは全て草原の駅に配置されている。
草原の駅の一番外側の線路を１本伸ばし、そこに延々とＶＩＰ車両を追加していっているのだ。
駅のホームから乗りこむ事ができ、車両ごとに分離し、１車両につき１家族が暮らせるようになっている。

正平専用車程ではないが、それでもホテルの１室レベルの室内に初めて入った家族は、
忘れかけていた人類の文化を思い出すような思いだった。
そしてそれを一度味わうととても手放したくない。駅の構内での雑魚寝や寝台車に比べる事も出来ない。
そしてそこからすらあぶれた人にとってはまさに天国である。
さらに必死に働こうとした。

もはや、正平は人々にとって神と同義であった。
実際世界の創造者なのだからその通りではあるのだが。

正平自身は、Ａ列車やシムシティのようなテレビゲームをリアルで体験している気分だった。
段々、人々が自分と違うもののように感じ、無理してまで彼らのために能力を使うつもりは無くなっていた。
実際、精神を消費するのは並大抵ではない。可能なだけ、許容できるだけで、
人間が死ぬレベルの苦しみを味わっているのだ。

彼が魔法を使うのは、彼自身の好奇心や実行したいという気持ちがその苦しみを上回った時だけである。
あるいは、その苦しみを僅かばかり忘れた時であった。

それなら徐々に線路を延ばせばいいのかもしれないが、ものすごい距離をちまちまやるのも
別な苦痛があった。一気に伸びる爽快感を知ると面倒になるのだ。
たとえ苦しみと引き換えであっても。

線路は何処までも続いた、なぜなら超絶の苦痛と引き換えに遥か地平線まで一気に伸ばしたためだ。
何処までも広がる草原の景色と、遥か地平線から連綿と流れる優しい風を受けて
ゆっくりと電車は進む。正平がのんびりと楽しみたかったからだ。

同乗するのは、近衛の3人。内1人はエルフのニエルである。
機織りの技術をとっくに伝え終わったのだが、ニエルが正平に忠誠を誓い、
正平もそれを許したために11番目の近衛となった。

正平自身、普通の人間よりも確実に役に立ちしかも美しいエルフが自ら役立ちたいと言ってきたので断る理由もなかった。
ニエル自身も偉大な創造者に仕える事が出来て非常に満たされていた。

この事は、ニエルが一度集落へ帰り伝えている。
集落のエルフ達も非常に喜んだ。
しっかり仕えるようにニエルも念をされた。

エルフの集落へ派遣された人間の技術者も集落が気にいったらしく仲良くやっていた。
ほぼ毎日卵を産む鶏はエルフ達に大事にされていた。
有精卵のいくつかが羽化してひよこが誕生していた。

エルフの子供たちがひよこと戯れる姿は美しくも微笑ましい。
草原を走る列車の前車両はいくつかの窓を開け放し、気持ちのいい風が車内を通り抜けるのを楽しんでいた。
あまり森から出ないエルフには草原の風が珍しくも心地良い。草原の風も悪くないと思っていた。

人間二人の近衛はそれぞれ、日本人と白人の２０歳ぐらいの男性である。
彼らもまた正平に絶対の忠誠を誓っていた。
それは近代の会社の上司と部下のような関係ではなく、中世の王と騎士のような関係であった。
あるいはそれ以上かもしれない。

近衛の家族には全てＶＩＰ車両が宛がわれている。
エルフのニエルにも１車両専用車を下賜されたが、そこはいまだに利用されず
ずっと正平と供に行動していた。
ニエルは正平の家族ともそこそこ仲良くしている。
ニエルは正平と同じ年代に見える。だが実際の年齢はかなり年上だそうだ。

変わり映えのない草原の景色も、遠方では見たこと無い動物を見かける。
細い幹に大きく広がる枝はの部分を持つ木が疎らに生えている。
サバンナに芝生を敷き詰めればこの光景になるのかもしれない。
強烈な魔力の波動のせいで危険な野獣だけでなくあらゆる生物が遠くへ逃げてしまった為に

動物を見かけることはなかった。ただ、遠方にそれらしい群れを確認することができた。

列車だけでなく線路にも魔力が通っている為に、近くまで動物が来る事はないが、
膨大な魔力の波動はレールを造ったその瞬間だけなので、そのうち見える範囲には来てくれるかもしれない。

車両の先頭で、淡く輝く魔法陣が描かれた小さな台の上に手を掲げて運転する近衛の白人が
件の山が目視できるところまで来た事を告げた。

彼は流暢な日本語を話せる。それどころか英語とその他４ヶ国語を操れる。
この世界では正平が日本人の為に日本語が基準となる。
その為、習得した高水準の語学力が生かされる機会は無いが、その知性は存分に発揮されるだろう。
ただ、すでに亜人が確認されている為に、正平以外に交渉できる人間としての期待もされている。

線路は、山のふもとを辺りを通過していた。
山は非常に高く、巨大であった。周りがまっ平らな草原であるから、より大きく錯覚してしまう。
そのコントラストは幻想的で、かつての地球のエアーズロックの存在感を感じさせる。
あるいはそれ以上の。

線路は、山を少し超えた先で途切れていた。
そこまでは走らせずに、中ほどまで走らせたところで停止させ、
そこに第７の駅を造った。

ここまでの距離が非常に長かった為に、真ん中にも一つ造っておいたのだ。
線路と平行して存在した川も途中で離れていき、この駅の近くには何もない。
この第６の駅は、「第二草原」と名付けた。

そして、第７の巨大な山の駅は後に「ドワーフの街」と名付けられる。

１　始まりの駅　　清水が湧き、エルフの集落がある。
２　美しい湖の駅　　透き通った湖がある。主要な飲み水
３　稲穂の駅　　沼地があり、食糧になりそうな稲穂の仲間が原生している。
４　海の駅　　海と隣接している。塩分が含まれているので海扱いされている。
５　草原の駅　　草原が広がっている。線路に平行して一本の川が流れている。
６　第二草原　　草原が広がっている。なにもない。
７　ドワーフの街　　巨大な鉱山がある。ドワーフが住んでいる。

山へは道のようなものが続いていた。
何者かが何度も利用しているような風である。

それをたどって行くとこちらに既に気づいているらしい亜人の集団が警戒しつつこちらをうかがっていた。
世界の創造者、正平である。人間達と取引してやってほしい。正平は彼らにそう伝えた。
日本語だが、魔力を帯びたその言葉は、エルフとも人間とも違う言語を操るドワーフ達に

ドワーフ達が使う言葉以上に彼らに意味を伝えた。
すぐに平伏しだす彼らを止め、まず近衛を紹介し、
次に人間と取引して欲しいというこちらの要望を伝える。

ドワーフは承諾してくれた。そして正平達を歓迎すべく宴が広げられることとなった。
ドワーフの出す料理は酒が中心で、塩辛いものが多かった。

彼らは男は例外なくひげをたっぷり生やしており、頭のてっぺんからつま先まで強靭な筋肉が覆っていた。
だからといってバカではない。人間と同じぐらいの知能と卓越した匠の技術を有している。
魔法も、炎を操るタイプのものを習得しているらしい。

エルフ程はないが、人間よりは魔力を持っているようだ。

濃い味付けの食べ物はエルフには辛いようだが、人間には酒の肴にちょうどいいものだった。
そして、この世界に来て初めての趣向品、酒だった。
きつく結構な癖がある酒だったが、正平の近衛で改めてよかったと心から感謝する人間2名であった。

ドワーフの鉱山では、鉄鉱石のほかに魔石も出土されるらしい。
魔石は宝石の一種で、カットすることで初めて力を発揮する。

その大きさとカットされた形によって、得られる魔法が決まる。
正平もエルフから貰った魔石を自らのインスピレーションでカットしたのだ。
カット方法や、その形は秘伝とされている。

ドワーフの創った素晴らしい工芸品をいくつも見せてもらった。
その中で一番目を引いたものが、サイコロ状の物を生産する不思議な機械だ。
なんでも魔力を固めて好きな時に魔力を取り出せるブロックを造り出すという機械。

大体ＭＰ６を消費して、ＭＰ５回復するアイテムができるらしい。
また、理論上は同じ形で、ＭＰ６０を込めてＭＰ５０を回復することもできるし、
ＭＰ６００まで込めることもできるらしい。

ただ、ドワーフの最大ＭＰは３０ぐらいなので、そこまで込める事はできない。
出来あがったサイコロ状の物は、鈍く銅のような金属で僅かに光を発しているようである。

正平はふと閃いた。
サイコロ状以外の形状はできないかときいたら、割と簡単に変えられるらしい。
それならばと、この機械を譲って欲しいと言った。

ドワーフは渋った。新しく製作すること自体は大した苦労ではないが、
製作するのに膨大な魔力が必要だったのだ。

その理由を聞いた正平は、さっそくこの機会を使って、サイコロ状の魔力の塊を大量に造って見せた。
最初は加減していたのだが、面倒になって行き、魔力の注入量を上げていった。

途中から、出来あがったものが銀白色の輝きを持ちだし、さらにしばらくして黄金に輝き始めた。

この出来あがったモノと交換してくれるように言った。
魔法を使ったわけではないせいか、あの精神の消耗はそれほど起きなかった。

大量のサイコロ。マジックポーションを見たドワーフは二つ返事で譲ってくれた。
ドワーフにとって重要なのは、それを造るときに大量に必要な魔力の方であった為だ。

出来上がる形状を正平は指定した。３段階の魔力に応じて変わるようなギミックも追加してもらった。
出来あがったモノには、表に電車と線路の絵、裏には数字が刻まれていた。
そう、貨幣である。

都合のいいことに、魔力の出力によって質も色も丁度、銅、銀、金に変わった。
もちろん銅でも銀でも金でも無い。使えば魔力が回復するポーションだ。

後に分かることだが、大量に所持する獣が近寄らなくなることに気付いた。
それはポーション自身の魔力によるものだが、まだこの時点では気づかない。

形作られる数字だけ変えて全て銅にすればいいのに、正平はなんとなく拘った。

しかし、これは後から考えると正解であった。
取引に応じてくれる道具やドワーフ達が欲している商品などを聞いた。
応じてくれるという道具は一気に生活や生産性を改善する可能性を示唆するものばかりだ。
ドワーフ達が欲している対価の幾らかは、すでに調達可能なものだ。
たったのＭＰ３で小さな炎が出せる魔法の力を習得できる魔石から造った宝石を買った。
実はこの魔法習得できる宝石は目減りするものではなく、これを使って何人でも習得可能なのだ。
ＭＰ３だから、普通の人間にもほとんど仕える。各駅には炎を管理する者が
昼夜見張っているが、それぐらい炎を起こすのは大変な作業だった。
つまり、この魔法は非常に有用である。
魔法は加工された魔石、即ち魔法石を媒介することでＭＰを消費し効果を顕現させる技術である。
もちろん元の世界である地球にはそのような法則も技術も存在しなかった。
魔法石は補助輪のようなもので何度か使用している内にそれなしでも発動できるようになる。
ただし、なれない内は余計に魔力を消費してしまうというものだった。
正平の創った３つの魔法石で使えるようになる魔法はどれも尋常でない魔力が必要な為に
正平以外が持っても仕方なかった。しかし、今回譲って貰った魔法

石は
人間達に人類史上初めて自ら行使する魔法となるのだ。

新たな通貨をＭＰ貨幣、又は単純に貨幣と呼び、見た目が銅、銀、金のそれぞれ１枚を
５ＭＰ通貨、５０ＭＰ通貨、５００ＭＰ通貨と呼ぶ事に決めた。
又は単純に、銅貨、銀貨、金貨とも。
今まで暫定の貨幣扱いである巻貝。を貝貨と改め、１ＭＰ通貨の価値とした。

６つ目の駅、「第二草原」駅に、ドワーフからもらった貨幣製造機を設置し、
ここに市場を開くことに決めた。

さらに、７つ目の駅「ドワーフの街」駅の間の区間にドワーフだけが利用可能なダイヤを設ける。
そして、運賃として１０ＭＰ通貨を徴収することとする。
すでに製作した、ＭＰ通貨を使ってドワーフの道具と交換した。

なぜ、ドワーフの街に市場でなく、一つ離れたところに造るのか。
一つにドワーフ達としても住処の近くを別種族に荒らされたくは無かった。
もうひとつの理由として、通貨を利用する文化を電車賃を通して理解させたかった為だ。

ＭＰ通貨自体にＭＰ回復という大きな利用価値があるのだが、
その使い道はあくまで価値の担保としてであり、なるべく通貨として利用して欲しかった。
その考えを根付かせる一端というわけである。

現状は、食糧や道具を調達し、その何割か徴収。それを全体として役立つ仕事をしている人に
分配するという、民間人と公務員が半々な状態になっている。
調達したモノはその間で物々交換するという具合である。
それを補助するように貝貨が使われている。

火の見張りや家畜の世話、成果がでるのがとうぶん先な畑の開発などは、公務員的な立場である。
彼らが得られるのは公平ではあるが同じもので、仕方ないとはいえ不公平感はぬぐえない。

そこで、この貨幣を利用するのだ。
公務員的な仕事にそれぞれ値段を付けて、定員以上集まれば賃金を下げ、定員を割れば賃金を上げる
という仕組みに変えることにした。

そして、食糧調達班は、調達したモノを売らせる。しばらくの間は正平が買い取り貨幣を渡し、
買い取ったモノを市場に並べる。物々交換でも貨幣でもどちらでもいいが、
保存の効く貨幣が中心に取引され始めるだろう。

さらに貨幣を集めるメリットとして、ＶＩＰ車両のホテル代にすることとした。
最初は安めに、人気が集中するたびに値段を少しづつ上げる計画である。

ＭＰ通貨からＭＰを取り出すにもまた魔法が必要だった。
ドワーフはほとんどが習得しているが、それが習得できる魔法石はあえて貰わなかった。

それはまだ必要ないだろうと思ったからだ。
自身も大量のＭＰをその身に宿しているのでＭＰ通貨から取り出そうとは思わなかった。

かくしてＭＰ通貨経済が回り始めた。

まずは、草原の駅で市場を開かせた。
そして余剰分は第二草原駅へ持って行った。

そこでは、数人のドワーフが市場を開いてくれていた。
人間も何人か常駐してそこで市場を開いている。

タンク車両から水を調達できるようにしてあるが、
ドワーフはこの水にも値段を付けた。

水代わりに酒を飲むドワーフにとって水は貴重なものだった。
鉱山でも水は調達できるが濃厚なミネラルを含み超硬水であった。
飲みすぎると腹を下すほどの。
軟水である川の水に大きな価値を見出したのだ。

銛、スコップ、のこぎり、釘とあらゆる金具を売りにだしてくれた。
こちらも、ミルク、卵、羊の毛に余った海産物。すっぱい果物などを提示した。

どちらも最初は物々交換だったが、徐々にＭＰ通貨で取引するようになっていった。
そして値段も落ち着き始める。

ドワーフは時折酒も商品として持ってきてくれた。
これが、人間側にとっては非常にありがたい商品だった。

娯楽の少ない世界においてこの趣向品は貨幣を稼ぐ大きな励みとなった。

徐々に貨幣での取引が定着し始めると、値段も安定していった。
それに伴い、ドワーフと人間の交流も徐々に広がって行く。
ドワーフ達は、第二草原駅までしか足を運ぶ事は無いが、
人間に対しては非常に友好的に接してくれていた。

いつの間にか１２人目の近衛が誕生していた。
ドワーフの女性ケットである。人間の幼女のような姿をしている。
非常に力持ちで引きしめられた筋肉を体の内側に隠しているようだ。

エルフの近衛について言及された際に、ドワーフ達も同じように
正平の側近を付けたいと申し出たのだ。
ドワーフは暑苦しいからと断ったら、ケットならどうかと言ってきたのだ。

暑苦しくなかったし、エルフの側近もいることだから、別にいいかと承諾した。
ケットは明るく元気な子で、幼女の外見と違い中身は大人の知性が秘めた女性であった。

市場がうまく機能しているのをみて、エルフのニエルもエルフ達を参加させたいと申し出てきた。
それならとおなじものを始まりの駅に開いた。

この駅は、エルフに配慮して、探索を終了した拠点であったが、
ニエルがエルフ達にこの件を話、彼らも乗り気になった為に、
市場としてのみその場所を人間側に開放したのだ。

駅の近くの木々を倒し、根っこを掘りぬいてちょっとした広場を設けた。
そこに、エルフは商品を持ち合って市を開いた。

人間も一人か二人そこに常駐するようになり、
ドワーフの市場と、エルフの市場を往復するだけで
ちょっとした財をなした者も出始めた。

基本的に列車は、人間には無料で乗れるようにしていたのだが、
全体にそこそこのＭＰ通貨がいきわたったので、乗車運賃を取り始めた。

１駅間を５ＭＰ通貨とした。
このときにドワーフの街と第二草原の区間も１０ＭＰ通貨から５ＭＰ通貨に値下げした。

エルフ達はＭＰ通貨からＭＰを取り出す術は持っていたが、
そのように使うよりもドワーフの製作した道具を買う目的で使った方が遥かに有用であると知った為
交換の対価としての通貨そのものに価値を見出した。

一部のモノ好きなエルフが電車に乗りたいと言い出したので、エルフにもＭＰ通貨を払い利用する術を
教えた。ついでにドワーフにも他の区間の利用許可を出した。

しばらく後に、エルフも直接第二草原駅まで買い出しに行くようになり、
そこで店を開くエルフも出始めた。

ちなみにまだ草原の駅は人間だけの市場となっている。

その理由は、正平の牧場などが介入している為に、煩雑にしたくなかったからである。
その代わり、第二草原駅は、完全に自由な取引がなされていた。

第二草原駅は常に食糧が調達できるくらい賑わい始めた。
ここでは、人間の近衛の１人が何人かの部下を連れて市場を仕切っていた。
彼らは、エルフとドワーフの文化を学び、それを伝える役目を負っていた。

治安をまもり汚物の管理なども行い始めている。
区画の整理をし、市が雑多にならないように、広い道を設定したり、廃棄物が散乱しないように、捨てる場所を一か所に決めたりした。

３種族が混在する第二草原に家が出来始めた。

貨物車を製作した為だ。
これをＭＰ通貨でまるまる利用可能にしたことで、
石材や木材がこの草原の真っただ中に簡単に運んでこれるようになったのだ。

エルフが木材を、ドワーフが石材をそれぞれ運び込み、店舗兼住居とした。
最初はそれぞれの種族が単独で建築していたのだが、
徐々に技術や素材を交換し別種族が協力して建て始めた。

他の駅でもロッジ程度の家は出来始めていた。
それは、ドワーフとの取引により調達可能となったオノやのこぎり、ミノのおかげである。

近代的な大工はそれでかつての家を建てる技術はほとんど持っていなかったが、
それをすでに予想して結構な数の宮大工がメンバーに含まれていた。
ようやく彼らの本領発揮とばかりに、徐々に家が立ち並び始め、
ＶＩＰ車両とはいかなくても、比較的まともな人間らしい生活が広がり始めた。

■人類初の魔法習得■

交流が始まる少しまえに、魔法石を一般公開した。
＜小さな火＞ＭＰ３

この世界の魔法の仕組みを人々に説明したのだ。
そして、普通の人間に魔法を使わせた。

これは、大きな驚きを持って受け入れられ、
何人かはこの世界を選んだ事に心の底から喜んだ。

当初、使用料を取ろうと思ったが、
なるべく早くより多くの人に魔法を体験してもらいたかったので、
一番人口の多い草原の駅に公共施設として自由に利用できるようにした。

早くて３回、遅くとも２０回使えば魔法石無しでも使えるようになるみたいだ。
もちろん、正平も＜小さな火＞ＭＰ３は習得済みである。

ドワーフから購入した、魔力計なるものも誰でも使えるように公共物として設置した。
これは、自分のＭＰを知ることができるのだ。
最大ＭＰ１０００まで計測できる。

当然、正平のＭＰはカウンターを振り切るので測れない。
しかし、人間程度なら十分である。

最大ＭＰは平均が１０であって、結構個人差があった。
なんと、最大ＭＰ５０をもつ一般人も中には居た。
彼は、元王族らしい。何かあるのかもしれない。

彼らには造幣機械の管理を任せることにした。
又自らのＭＰで造った貨幣は自分の物にしてよいとした。

■０４　半年経過■

８万居た人口は既に２万人を切っていた。
しかし、その減る勢いもなだらかな傾斜になってきている。
家畜もある程度の柵が造らたため、野獣に食われる被害は格段に減った。

＜小さな火＞ＭＰ３はかなり大勢の人間が習得しているが、
それでも連日練習場には長蛇の列ができている。
まだ、習得していない人が並んでいるのだ。

正平は、あれから線路も列車も駅も増やしていない。
魔法も＜小さな火＞ＭＰ３を習得してそのままだ。

焦る必要は無かった。
寿命が無限になった為か妙にスケール感が広がったらしい。
まずは現状を楽しむことにしたのだ。

いまだ大半を正平が斡旋する仕事が大半であるが、それでも徐々に幾多の仕事が発生し、正平の支える手に加わる重みは軽減していった。

家畜は正平の管理下だったが、ＭＰ通貨で購入できるようにする検討をしてみた。
第二草原に広がる市場で、牛のつがいをオークションにかけてみた。
すると思いもよらないほどの高額で落札された。

落札者はエルフであった。

牛の出す牛乳を非常に好んでいたようだ。
彼は、牛を増やすつもりでいる。
その後人間の技術者をＭＰ通貨で雇ったらしい。

あまりにも好評だったために、定期的に、家畜のオークションを行うことにした。

また、市場ではオークション形式も比較的ポピュラーである。
値段が安定し始めた商品は、露天や店舗に出店されているが、
新しく出始めた商品は値段が分からなく、
その為にそう言ったものを一括してオークションを行う広場が出来た。
人間、ドワーフ、エルフから毎日のように新しく、価値があるかどうかお互い不明な商品が出品される。
当然掘り出し物もでてくるので、人だかりが１日中できていた。

ドワーフにとっても非常に貴重な魔石が出品されたこともあったらしい。
その時は大量のＭＰ通貨で人間が落札したらしい。

正平もそのオークションを見るのが好きな１人であった。
ある日、エルフから、魔法石が出品された。
どうも加工に失敗して、微妙な魔法になってしまったらしい。
中身は、＜微消毒＞ＭＰ１　という＜解毒＞ＭＰ２０　の失敗作らしい。
話を聞くとオキシドール程度の価値はありそうだ。

本来極秘技術の結晶である魔法石なのだが、この程度なら別にいいらしい。
しかし、この世界の人類にとっては２つ目の魔法であり、

又この手の技術を持っていなかったドワーフにしても非常に欲しい魔法だった為に
オークションはこの２種族により白熱した戦いが繰り広げられた。

正平もこの戦いに参加したい気持ちでいっぱいだったが、水を差すことになりかねたい為に、
参加せず眺めることに決めた。

かつて無い高値がついた。落札者は人間の商人で、
最初のころから貿易などでたっぷりの資金を稼いでいた男だ。

しばらくすると、魔法の館なるものを建設し、
ここで１回の使用につき１０ＭＰ通貨をとるという商売を始めた。
＜小さな火＞ＭＰ３以外の魔法も使いたい人々で連日長蛇の列ができた。

効果は小さくとも＜微消毒＞ＭＰ１は非常に実用的だった。
まだほとんど薬が発見されておらず、＜解毒＞ＭＰ２０が使えるエルフには必要が無い為に
代わりの効かない貴重な技術であった。

その様子をみたエルフが、＜解毒＞ＭＰ２０で同じようなことをしようと企むが
エルフの集落をまとめる村長がそれを許さなかった。
ただ、結局ＭＰ２０以上ある人間はほとんどいない為に＜微消毒＞ＭＰ１の方が需要があると思われる。

海辺では河岸が開かれていた。
比較的かつての地球で取れたような魚と同じ姿の生物から、見た事もない異様な生物と

さまざまな魚介類が取れた。

食べれるかどうかは不明だが、徐々に食べれる物と食べれない者、
おいしい調理の仕方などの知識が
蓄積され始めていた。レンジャーなどが中心になって調べていたようだが、
その作業の際、結構な人間が命を落としているらしい。

やはり、元の世界の常識がなかなか通じないのが原因で、結局食べるまでは分からない。
それでも食べれる種類が増えるにつれ、訪れる人が徐々に現れ出し、
血抜きした魚は貨物列車に乗せられ、第二草原の市場まで運ばれる。

また、新鮮な魚を食べる為にここまで足を運ぶ人もいる。
並行して塩田も造られていた。

当然この技術が必要になる事は予想されていたので、人間のメンバーにそうした技術を持った人が
含まれていた。ただ、正平の世界解説ではそう簡単に海へ辿り着けるとは予想していなかった為に、
あくまで念のため程度であった。

ところが、世界へきて数日と経たないうちに海と遭遇できたのは幸運以外の何物でもない。
さっそく、砂浜と日光を上手く利用した塩田が造られた。

ただ、そのしょっぱい塩化物が本当に塩なのかどうかはわからない。
出来た塩は元の世界で食卓に並んでいたものよりも遥かにおいしかった。
ただ塩っ辛いだけでなくミネラルがふんだんに含まれていたのだ。

最初は草原の駅で出品していたが、後に第二草原の市場でも売られる事になった。
第二草原の市場で大人気の商品となった。
ドワーフは岩塩を使っていたが、これは結構貴重らしい。
エルフの食事は薄味だが、塩が手に入るなら使いたかったらしい。

機織りでの日産１０人分の衣類だけでなく、エルフ手製の服や、ドワーフが獣のなめし皮から
つくった上着も手に入るようになった。
さらには、エルフの機織り機も購入できるようになり、人間のほとんど全てに服が行きわたった。

食糧も多くの果物の発見と魚介類と奇しくも人口の減少によって、
とりあえず大抵の人が毎日食事を口にできる程度までに上昇した。

当初の予想ではもっと人口は減少し、いまだに何日も空腹の日々が続くと思われていた。
しかし、いろんな幸運が重なった。
エルフとドワーフとの交流が持てた事。そしてそれを促したＭＰ通貨の御蔭だと。

混沌とした集団をまとめるのは非常に難しい、食糧が十分に調達できなければ一層難しい。
絶対的な権力を持つのはまだ中学2年生の少年である。
彼が頂点となって共産主義を行うのは困難であった。
有識者はたくさんいたが、被支配層に含まれる彼らが同じ被支配者達を使うのは、使われる彼らも許容しがたい。

しかし、仕事の代価を全て貨幣にし、労力の価値を労働者に決めさ

せることで
支配者がなにかをすることなく上手く回り出した。
貝貨の利用もそうだが、すぐに貨幣経済に切り替えた正平は、大英断だったと言える。

このときは正平も知らないのだが、
他の世界の内、貨幣経済に比較的早めに移行したところは生き残り、後回しにした世界は、ひどい有様である。
種が断絶したわけではないが、それまで人類が重ねてきた英知はぷっつり消えるほどの。

貨幣だけが原因ではもちろんないが、貨幣という観点から見た場合はこのような結果になったわけである。
ちなみに、１２人中一番最初に貨幣経済に移行したのは正平である。

日本人は清潔好きであった。世界的に見て潔癖というレベルで。
ここまで文化レベルの下がった世界においてもこの性格が変わる事は無かった。

ドワーフの協力もあり、鐙（あぶみ）が完成した為に馬での探索が可能となった。
そこで、第４の海の駅から海の逆側を探索した一行がとんでもないものを見つけた。
それは、天然の温泉である。

駅からはかなりの距離がある。しかし、噂を聞いた人々は、その湯に浸かりたいと強く願った。
正平が線路を追加すればいいのだが、なんとなく直線にしか敷きたくなかったために、
別の方法を実行しなければならなかった。

そこで、家畜オークションで馬を数頭買い取った人間が、ＭＰ通貨を取って送迎を開始した。
このサービスが大人気となり、温泉地にもいくつかの建物が立てられ、
通る道も徐々に整備されていった。

正平も温泉に入りに行った時、非常に気に入った。
しかし、路線の追加はしなかった。初志貫徹が好きな言葉だった。
この後も線路はずっとまっすぐ続いて行ったのだ。

しかし、これもまた正しい判断だったと言える。
この御蔭で電車ばかりに頼ることなく、いろんな交通手段が発達することとなった。
この馬車も正平の信念によって生まれたと言えるかもしれない。

実はエルフも清潔好きで、温泉に入るという風習を気に行った個体もちらほら現れた。
普段はもちろん水浴びをしている。

第二草原で井戸を掘る計画が持ち上がった。
食糧調達に振り分けられていた技術者たちが徐々に余裕が出てきた為に起こった現象の一つである。
ここはいまだに第２駅である美しい湖の駅から調達した水に頼っている。

しかし、人数も増えてきており、供給が需要に追い付かなくなってきていた。
そこで、現地調達するということである。

すでに、タンクからの水は無料ではない。需要が高い為徐々に値段が上がっていた。
ちなみにタンクの運用権利はオークションで落札される。
水は落札者であるタンク運用者が好きに決めている。
現在タンクは2車両あり、一応独占出来ないように取りきめられている。

井戸の管理と使用料をタンクの給水よりも十分安くできると見積もられている。
人間の技術者と採掘技術の優れたドワーフが協力して、掘り始めた。
何箇所か調査した後、人間の技術者が水脈を探し当て、立派な井戸が完成した。
エルフが水質を調査してくれ、とうとうタンクに変わる新しい水源を確保することができた。

これと並行して、風呂屋を造る勢力があった。
こちらも、エルフとドワーフと人間が協力して造ったものだ。

人間の構想をドワーフの石材で実現し、エルフの解毒魔法の亜種で、何度も貴重な水を使いまわせるように
魔法で管理するものだ。水をお湯にする為の火力はもちろんドワーフが管理している。
その機構を実現したのは、人間の技師であった。

エルフとドワーフのそれぞれの魔法がより効果的に作用する構造。
使える建材や素材はまだまだ限られている中で見事な風呂屋を実現した。

温泉まで行く事が出来ず、冷たい水を浴びるのが精々な人々にとっ

て、
この施設は非常に素晴らしいものだった。
毎日入りに来る人間も少なくなく、風呂屋は大盛況であった。
そして第二、第三のお風呂計画も立ち上がるほどである。
同時に人間の衛生と精神の環境が大幅に改善された。

毎日でなくてもたまに入りに来れるだけでも非常に大きな効果があったのだ。
他の駅の近くにも設置して欲しいと言う要望がいくつも上がった。
企画者のエルフとドワーフそして人間は、その成果に非常に満足したのだった。

人間の人口減少も歯止めがかかり、新世界での初めての生命も現れ始めた。
赤ん坊が生まれた世帯には、正平の名で２００ＭＰ通貨が送られた。
このころから食堂や屋台のような既に食べれるものを出す店も出始め、
１食分の相場は、５ＭＰ通貨前後となった。

貝貨はいまだに補助通貨としての価値を有していた。
海岸で巻貝を集める姿も見かける。

かつての人間の拠点と定め巨大な駅とたくさんのＶＩＰ車両を有する「草原の駅」も
３番目ぐらいの人口になっている。
２番目は、河岸と本場温泉で賑わう第４の駅「海の駅」
そして１番賑わうのはもちろん、第６の駅にしてもともと何もなかった「第二草原」の駅近辺。

本来森からでないはずのエルフも永住する勢いの個体がちらほらいるし、
鉱山と鍛冶が命のドワーフも同じようなのがいる。
第二草原は建設ラッシュが続いていた。

そして、この街はいまだに近衛とその側近がしっかり管理を続けている。
御蔭で乱雑に店などが立ち並ぶ様な事は無く、整然とした道ができあがっている。
駅の前の広場から、広い道路が真っ直ぐ伸びて、
そこから線路と平行に幅員を小さくした道路がいくつも左右に伸びていた。

大きな道路と、駅の近辺は全て商業施設が、枝はの小さな道の面したところには
個人の家が並ぶようになっていた。

大きな道の両脇にはなんと溝ができており、水が流れるように勾配が出来ていた。
近衛が測量師などを雇ったらしい。近衛にはある程度ＭＰ通貨を自由にしよう出来るようにしている。
どういう風に使ったかは定期的に報告させるようにしている。

人間から選抜された近衛は基本的に超優秀であった。
それを理解しなるべく自由に行動させた正平も何気に大したものだった。
新しく近衛に参加したニエルとケットは、今のところ正平に知識を与える役目であったが、
気追う事もなく楽しんでいるようだった。

正平につき従っていた近衛も人間も、語学力抜群の男と入れ替わりに最年少天才少女のジェシーが着いた。
他の二人が女性なので、人間からも女性を付けるという余計な世話であった。
ちなみに正平は、創造神という種族扱いされているが、本人は人間のつもりだ。

そんなわけで、正平は何処へいくにも3人の女性をつき従えている。
他の近衛の報告はすべてジェシーが受け持っており、ジェシーから大まかな状況をかみ砕いて説明させていた。

ある日、ドワーフから魔石、つまり魔法石の原石が献上された。
市場を開いてくれたことのお礼としてドワーフのまとめ役から送られたのだ。
正平はさっそくカットすることにした。

カットは魔力を使って行う。掌に載せ掴む。いろんなインスピレーションが浮かぶ。
これは魔法の効果よりは出来あがった魔法石の形を思い浮かべている。
出来あがるまでどういう効果をもたらすかは分からない。

ドワーフとエルフは浮かべインスピレーションは代々同じような物で秘伝である。
しかし、正平はそういうものは無い。
カットに消耗する魔法は地味に多く、空を見上げると正平を中心に雲が渦を巻いていた。

こぶしから一瞬閃光が放たれ、掌には美しい宝石、魔法石が残った。
＜治療＞ＭＰ５０である。

エルフの系統に似ているが、ニエルはその宝石の見た目とその力に驚きそしてほれぼれと見とれた。
魔法石の出来はカットする人の魔力、技術、インスピレーション、そして魔石の質によって決まる。
高品質な魔石を送られたことに対して直接お礼に行くことになった。

ひさしぶりの「ドワーフの街」駅。その駅はほぼドワーフだけが利用している。
ここに直接買いに来る人間は居ない。ドワーフにせよエルフにせよ別種族に荒らされるのを好まない者は少なくない。

始まりの駅でのエルフの店もいつしかさびれて消滅してしまった。
たまにエルフと手を組んだ人間が、大量に仕入れに時間を指定してやってくるぐらいである。

「ドワーフの街」駅を降りて、最初に見た時よりもはっきりと現れている道を通り、
ドワーフの長へ挨拶に向かう。
そこで、大事故が起きた事をしった。

たくさんの技術者が重体になっており、生き延びる可能性は半々の物が数十名。
その中には長も混じっていた。
ドワーフの近衛であるケットもその光景に蒼然となる。
どうやら、家族が含まれていたらしかった。

ちょうどさっき出来たばかりの＜治療＞ＭＰ５０を彼らに使ってみる事にする。
その膨大な魔法の力は、１人を対象にしても近くの人間もついでに

回復するという
とんでもない効果を発揮した。対象は即全回復した。
ほとんど無尽蔵の魔力を有する正平は、生きているドワーフ全員に対して魔法の治療を実行した。
死んでしまったドワーフを除いて全て完全回復した。長とケットの家族も無事だった。
ケットからも激しく感謝された。
予想はしていたにせよその威力を目の当たりにしてニエルは感心しきりだった。

長たちからは、その魔法に対する対価を払うと言った。
正平は魔石のお礼にきただけで、＜治療＞ＭＰ５０もそれによって出来たと伝えた。
ならばと、長はまたいい魔石が見つかったら献上するということで話は決着した。

大量に使用したことで＜治療＞ＭＰ５０は習得してしまった。
誰かに譲ってもよかったが、せっかくだし何かの商品にでもしようと考えた。
この魔法石の完成度もエルフやドワーフが見た処、最高傑作レベルで、
いわゆる一つのアーティファクトである。
列車関連の３つもそのレベルと言えなくもないが
使える人間も用途も限られすぎていた。

これを使った習得させて病院でも造るべきなのかもしれないが、
あまり魔法に頼りすぎるのは良くない気がしたので保留にした。

しばらくすると第二草原の市場に武器が並ぶようになった。

ドワーフの創る武器は、優秀で質が非常に良い為、容易には別種族に渡したくなかったらしい。
しかし、前回の一件で方針を変えたとのこと。

正平はもちろんのこと、治療を一緒に手伝ったエルフのニエルや、人間のジェシーにもドワーフ達は非常に感謝したらしい。
その為、製作した武器の一部を市場に流すことに決めたとのこと。

いつは探索隊の死亡原因の半分は野獣と戦ったことによるもので、それなりの武器があれば助かった可能性が高かった。
まず、いつも通りオークションに出品された。どれも高値がついたが、その価値は値段以上と言えた。

正平もなんとなく近衛隊全員分の武器を買ってやった。
これは、直接造って貰ったもので、形を統一してもらった。
代価は何度も拒否されたが正平はちゃんと支払った。

１２本の剣は、もはや芸術品であった。切れ味の鈍らない魔法がかけてあり
血糊で錆びたりすることは無いらしい。ちなみに正平は嵩張るので貰わなかった。

■とある創造神の世界■

家畜は残り数頭まで減り、寄りそう人間は５０人を切ろうとしていた。

一度最高まで引き上がった文化を元始レベルまで戻して生き残るの

は並大抵ではなかった。
まず水場を発見するのが遅れた。
そして家畜に対する人間の割合が大きすぎた。

持ってきた家畜以外の食糧がなかなか見つからず、ついには内部で分裂してしまった。
いくつかの派閥に分裂し、それぞれのリーダーが勝手に旅立ってしまった。
家畜も一緒に持って行かれた。

残ったのは、創造神と一緒のグループ。
旅立った者たちは創造神の恩恵を知らなかった。
それまで一度も遭遇しなかったモンスター。
創造神の一行から離れてしばらくすると唐突に出現したのだ。

まず、家畜がやられ次に人間がやられた。いつしか全滅。
他のグループも大体おなじ。
数人が生き延びたようだが、服すらまともに調達できていない状態である。
まもなく彼らも絶命する運命であろう。

創造神含めてだれも気づかなかったが、
創造神は不思議な力で自らの周りをモンスターから守っていたのだった。

長い旅の末に小さな湖とその畔にイチゴのような果物が実っている木を発見した。
彼らはやっと安息の地を見つけたのだ。
みんな感動と嬉しさのあまり涙を流した。

体中傷だらけでひどいにおいがしていた。
ここまで水源すら確保できていなかったのだ。
朝露や僅かな水たまりで凌いでいたという。

この世界に魔法があるかどうかは不明である。
別の一行が確認した生物は全て敵対的で狂暴なモンスターのみであった。
創造神がいったいどんな能力を持っているのかは不明であるが、
魔法以外ならおそらく正平と似たようなものであろう。
新世界に来て僅か半年。２０万人居た人口は５０人になっていた。

・・・

光を吸い込むような艶のない暗黒色で扉を象ったかのような造形の魔法石。
＜異次元表示偵察＞ＭＰ１２００
正平がオークションで落札した魔石から新たに作成した。

正平が見たのは、別の創造神の世界だった。
この現実を知ったのは、正平と近衛の１３人だけである。
もし自分よりも上手く世界を運営しているところが映し出されたら悔しい気がしたので
側近だけで見ることにしたのだ。しかし、そのあまりに壮絶な光景に言葉を失った。

同じ様に発展しているなら公開しようと思ったが、封印することにした。
ここまでひどい状況を晒すような真似をしたいと思わなかったのだ。
近くで見ていた近衛達も同じ気持ちだった。
加えて、この世界を選んだ自分と造った創造神にどこからともなく

感謝の気持ちが湧き出した。

別の世界を覗こうとしたが上手くいかなかった。
どうも見た世界に強い精神的なショックを受けてしまったらしく上手く発動しなくなった。
しばらく時間を置くことにした。

まとめ

■登場人物■

創造神　小森正平（こもり しょうへい）
エルフ　ニエル
ドワーフ　ケット
人間（金髪）　ジェシー
（他９名の近衛隊）
（正平の両親と妹）
別世界の創造神　佐々木玲子（ささき れいこ）

■駅と近辺の人口■

１　始まりの駅　エルフの集落エリア　ほぼエルフのみ　人口　２００人程度
２　美しい湖の駅　給水場　最南端の探索拠点　人口　１００人程度
３　稲穂の駅　田園予定地　人口　５００人程度
４　海の駅　河岸に塩田　温泉街の最寄り駅。　人口　３０００人程度
５　草原の駅　大牧場と、ＶＩＰ車両配備　一番大きな駅　人口　２０００人程度
６　第二草原　いつしか巨大な商業地が出来あがった。　人口１２０００人程度
７　ドワーフの街　ドワーフの集落エリア　ほぼドワーフのみ　人

口　３００人程度

■魔法一覧■

＜列車・顕現＞ＭＰ２０００（１車両）
＜レール・顕現＞ＭＰ２５（１ｍ）
＜駅・顕現＞ＭＰ９０００（１駅）
＜小さな火＞ＭＰ３（ライター程度の火を出す）
＜微消毒＞ＭＰ１（オキシドール程度の消毒）
＜治療＞ＭＰ５０（瀕死から全回復させる超回復魔法）
＜異次元表示偵察＞ＭＰ１２００（別世界の概要を数分間映し出す）
＜解毒＞ＭＰ２０（現在エルフだけが使用可能）

■ＭＰ最大値■（個人＆種族値）１２時間で全回復

創造神・正平　ＭＰ５２０００００（使い続けると増えるらしい）
エルフ・ニエル　ＭＰ２２０
ドワーフ・ケット　ＭＰ７０
人間・ジェシー　ＭＰ２０

人間　ＭＰ１０
ドワーフ　ＭＰ３０
エルフ　ＭＰ２００

■05　<造幣機械>■

しばらくするとまた一部で物々交換が再開され始めた。
市場に物は増えたがＭＰ通貨はあれからほとんど増産していなかった為に
相対的な流通量が減ってしまった為らしかった。

正平は現在の最大価値を持つ貨幣である５００ＭＰ通貨、別名金貨を造るならともかく
弱い魔力で永遠と出し続けなければならない５ＭＰ通貨、別名銅貨を造るのが面倒だった。
しかし、市場で最も必要とされているのがこの銅貨で、だいたい１食分の価値がある。

さらに調査したところ相対的だけでなく、実際にドワーフがＭＰ回復用途という
本来の使い方で消費することがあるらしく、本当に実数が減っていた。

そこで、銅貨を人間に造らせることにした。
<造幣機械>を４つ追加で造ってもらった。
それを、第２～第６の駅に設置した。
誰もがＭＰ６を消費して５ＭＰ通貨をゲットできるようにしたのだ。

これで毎日駅に行けばとりあえず最低１食はありつけるようになったわけである。
まだまだ偏りがあり、丸一日食事にありつけないような人も結構いた。
なるべくそうならないような政策を考えているがそうそう簡単に行

くものではない。

もともと、最低限度を全員に行きわたらせるというのを一つの目標としてきた。
この方法なら、駅に行けばとりあえず1食分ありつける。
単純な施しではない、ベージックインカムとして機能し始めた。

銅貨の流通量が増える。
僅かばかりインフレしたが、許容範囲である。
それに消耗品としてもＭＰ通貨は優秀であった。

相対的に銀貨や金貨が減ってきたので、正平は一気に増やした。
増やした銀貨と金貨は、第二草原に設置した銀行に保管されここで両替することができる。
銅貨を稼ぎまくった商人が持ち運びの便利な金貨や銀貨に変換しておくのだ。
又ここでは、正平と近衛が出す小切手をＭＰ通貨と交換することもできる。

小切手は現在のところ、羊皮紙に墨で発行者と金額を書いたものである。
絞めた家畜やエルフがとらえた謎の野生動物からとった皮で羊皮紙が造られていた。
まだまだ貴重品で、市場にはあまり出回らない。

１００００ＭＰ通貨（金貨２０枚分）以上から預けることもできる。
これは暫定的に始めたサービスで、普通利息がつくものだが、
預け代金として逆に１００ＭＰ通貨支払わなければならない。
預けた金額の証書が発行され、必要な時に証書と交換で預けたＭＰ通貨を受け取ることができる。

取引額が大きくなってきた一部の商人に人気のサービスとなった。
金額が書かれた証書をそのまま同額の商品と交換するといった使い方がなされた。
小切手自体はまだ公平と近衛しか使えない為でもある。

銀行は現在のところ、第二草原にだけある。
その為なお一層第二平原の商業は活発化してきた。
海の駅に支店を出して欲しいという要望もちらほら聞こえてくる。

最初の造幣機械は銀行に保管され、たまに正平がやってきては金貨や銀貨を造った。
普段は近衛の１人が銀行を取り仕切っている。
念のために銀行の警備として常に２人常駐させ、交代制で昼夜問わず守らせてある。

駅に設置されている、造幣機械は連日長蛇の列である。
もう少し増やすべきだと思いつつ面倒なので放置している。
民間でもこの機械の受注許可を求めているようだが、保留である。

ちなみに銀行以外におかれている造幣機械は、銅貨のみを製造できる廉価版である。
さり気にＭＰの多いエルフも自らのＭＰを消費して銅貨を製造する姿を見かけることがある。

一子相伝門外不出の魔法石も、長老の許の元、一部公開許可が下り始めた。
最初に許可がおり商売になったのが、ドワーフの秘伝、
＜効率上昇エンチャント＞ＭＰ１０
である。

これはのこぎりやスコップなど金属でできた道具にかけることにより
作業能率が３０％ぐらいＵＰする魔法である。
その汎用性の高さから、魔法屋ができるやいなや大盛況となった。

消費ＭＰは人間の種族値ぎりぎりであるので何度か通わないと習得
できないが、
これも非常に魅力的な魔法であった。
ドワーフも＜微消毒＞ＭＰ１で使用料を取る魔法屋の大成功を羨ま
しげに見ていた為に
このことで溜飲が降りた。

さらにドワーフの追撃は続く。
ＭＰ通貨を補助にまわし、自分の魔力と同時に消費するアイテムを
開発した。
その名もマジックアイテム＜魔法の財布＞

この財布にＭＰ通貨を入れると、自分のＭＰに財布の中身分のＭＰ
が加算される。
そして消費するＭＰの足りない分は自動的に財布から消費される。
ＭＰ最大値の低い人間にとって超絶優れモノであった。

まだ、使える魔法の種類は大した数ではないが、将来的に増えそう
な雰囲気がぷんぷんしていた為に、
この＜魔法の財布＞は飛ぶように売れた。
ドワーフ自身もそれまでは、ＭＰ通貨やサイコロ化した魔力を自分
のＭＰに取り込むという形をとっていた為、
この財布は本人たちにとってもかなりの発明品だった。

この流れから、潜在的にＭＰ１０オーバーの魔法も利用可能になっ

たと理解したエルフ達は
負けじと<ろ過>ＭＰ１５を繰り出した。
これは、そこまでひどくない水を飲める水に変える魔法である。
調査隊に非常に重宝される魔法となった。

もちろん、正平は両方とも習得した。
彼らが商売を始める前に優先して魔法石を使わせてくれたのである。

こうして、<魔法の財布>や新たな魔法の御蔭でインフレが止まった。
ドワーフとエルフからの要望で、１番目の駅と６番目の駅それぞれにも造幣機械が設置された。

運賃は、どこまで行っても１０ＭＰ通貨固定になった。
乗車する際にコインの挿入口に銅貨２枚を投入することになる。
投入されたコインはそのまま電車を動かす魔力に変換される。
正平がひそかに改良したのだ。

■06　ダークエルフ■

安定してきたので、そろそろ路線を拡張することに決めた。
ドワーフの街で終わっていた2本の線路をさらに遠方に伸ばし始めた。
いつもどおり膨大な魔力の奔流が渦巻き、そして前方へ濁流のごとく流れて行った。

魔力が引いた後には美しい線路が真っ直ぐ2線伸びていた。
久しぶりに吐き気と死ぬような精神の消耗を覚えつつ、
専用の黒塗りに金の細工が施された2両の列車を走らせた。

この2両に乗るのは、正平にニエル、ケットにジェシーである。
いつもの近衛隊だ。
両親と妹は第二草原にソコソコの屋敷を構えて楽しく暮らしている。

山を越えた先も又ずっと草原が続いていた。
それでも新しい風景に4人はわくわくする心地良いものを感じていた。

正平の膝の上にはケットが居座りマッタリしている。
隣にはジェシーが座り、時折街の発展具合を嬉しそうに報告してくれる。
対面の席ではニエルが草原から吹く風を楽しんでいた。

かなり進んだところで、村らしきものが見えた。
これには、近衛の3人も驚きを隠せない。
もちろん正平だって驚いた。

エルフもドワーフも魔法を門外不出にしていたが、
誰に対して不出なのか分からない。

この世界は創造神が生まれるより後に出来たはずなのだが、
なぜか、それよりもはるか昔から世界は存在しているらしく
どちらの集落も開発した魔法を外へはあまり流出させるべきではない
と言い伝えられてきたらしい。

誰に対してか分からないが、自分達以外の人型が存在することは示
唆されていたわけだ。
それが、エルフとドワーフをお互いにさしていたものというわけで
もなさそうなのだった。

その為に、新たな集落が存在する事は予想されていた事ではあるが、
エルフもドワーフもお互い以外の存在はこれまで知らなかったらし
い。
その為に今回の遭遇は大きな驚きを持って迎えられた。

1人のエルフに似た外見の住人を捕まえていろいろ話を聞いた。
どうやら、ダークエルフの集落らしい。
かなり小さな家が並んでいるかと思えば、1階部分はほぼ入口だけ
で、
地下に家が埋まっているような構造らしかった。

集落といってもそれほど密集しているわけでもなく、かなり疎らに
点在している。
地盤は草原から岩肌にかわりつつあった。
線路の左側に多く、右にほんの少しだけ建物が見える。
どうやら集落の東側を貫通したらしかった。

とりあえず、その場所に駅を設置し、第８の駅ダークエルフ街と名付けた。
向こうのホームにわたる手段も今回は上からじゃなく下から通してみた。
ひょっとしたら、ダークエルフのつくる地下の公共スペースとかになるのではと勘案してみたのだ。

徐々にダークエルフが集まってきて、みんな正平と話したがった。
容姿は、エルフ同様美しく、エルフと違い肌の色が濃い。
エルフほどではないにせよ魔力もかなり高かった。
生活の違いは、エルフが森で暮らすのに対して、ダークエルフは洞窟や地下に暮らすらしい。

言語はエルフではなくドワーフにかなり近い感じがした。
正平は何の苦もなく会話できるが、エルフは理解するのが辛そうだった。ドワーフはなんとなく理解できるようだった。
ジェシーは常にニコニコしていたが、言葉はほぼ理解できていなかった。

ダークエルフ達は、かつて遥か北の方からここまで逃げてきたらしい。
何から逃げてきたのかというと、どうも紛争が勃発しているとか。
それもずいぶん昔の話だから、実際のところ不明だという。

ダークエルフ達は普段どうやって暮らしているのかというと、
地下道に生息する巨大ミミズやモグラを捕まえて、それを食べているのだという。
それがおいしいのかと聞けば別においしいわけでなくそれ以外ほとんど食糧が調達できないとか。

＜苦み取り＞ＭＰ３や＜栄養強化＞ＭＰ９を使ってなんとか食べ物の体裁を保っている。
しかし、異様な匂いや気持ち悪い見た目はどうしようもなかった。
地下の湧水に住む洞窟エビや月見ラビットという夜中に姿を見せる兎が極稀に手に入る最高の御馳走だとか。

どうやらダークエルフも人間や他の亜人と同じようにおいしいものはおいしいと感じる味覚を持っているらしい。
今回は正平が主催し宴会を開くことにした。
このダークエルフの里は僅か５０人が暮らす村だったので、列車に常備している食糧だけでも十分御馳走できる量だ。

バラエティに富んだ食材で、近衛達が腕によりをかけて料理した。
普段ひどいものを食べているダークエルフは、魔法も使わずここまでうまい料理をお腹いっぱいに食べた事は無かったらしく、半分ぐらいが涙を流して喜んだ。

正平がこれまでやってきた事を彼らに分かりやすくゆっくり伝えていき、
ここにつくった駅からも電車を出すから、第二草原の市場で買い物をすればいいと誘ってみた。

他の集落と同じように慣れ親しんだ土地を離れるのに強い抵抗があるようだが、
日帰りでも可能だということを聞いて心が動いたらしい。

＜造幣機械＞でＭＰ通貨を作ってそれで買い物するのももちろんありだが、
ダークエルフの技術でさらに市場と生活を豊かにしてほしいと考えた正平は

何か売れそうなものは無いか聞いてみた。

そしてなんと絹糸を生産できるらしかった。
暗黒蚕という種類で闇色の絹糸である。
よく見ると、ダークエルフ達の着るものは暗い色でその質が分からなかったが、
触らせてもらうと非常に滑らかで心地よいものだった。

エルフに作ってもらった羊の毛に似た体毛をもつ野獣から採取した毛糸で編んだ服もなかなか着心地がよかったが、
これは別格だと感じた。
早速自分の分を注文した。ついでに家族と近衛の分も注文した。

今回も例によってただでくれると言ってきたのだが、
ちゃんとＭＰ通貨を支払った。価格は適当に予想して支払った。
１着につきさっきみんなと食べた分と同じものが買える代金だと話したらみんな飛びあがった。
つまり、おいしい料理約５０食分である。

すでに闇絹の生地はストックがあるらしくすぐに仕立ててくれた為、
それを着てみた。
非常に着心地が良かった。

早速彼らの何人かをつれて巨大商業地に発展した第二草原に連れて行った。
もちろん彼らも電車に乗るのは初めてで、それどころかこれほどの距離を
住処から離れたこと無く多少不安に思いつつもそれを上回る興奮が支配しているようだ。

第二草原の駅についた時に外交担当の近衛が部下を付けてくれた。
言語が違う為結局正平がいろいろ説明することになったのだが、近衛の部下もなかなか優秀で
言葉は通じなくてもダークエルフとなんとか疎通に成功していた。

専用車両から出たダークエルフ3人は、最初人の多さに驚いた。
第二草原に居る人々もダークエルフの姿を見て当然驚いた。
しかし、正平と一緒に居る所をみて、なにか納得したらしかった。

闇絹の対価に渡したＭＰ通貨での買い物の仕方を教えてあげた。
又、風呂場や食堂などの利用方法も教えてあげた。
帰りにたくさん買い物をして住処へ帰って行った。

このとき既に新しいダイヤを設定し、車両も魔法で増やしておいた。
近衛に新しい盟友、ダークエルフが加わったことを知らせれば、それぞれが管轄する人へ伝え
すぐに広まるだろう。ダークエルフにもこちらの文化を知ってもらう為に住処に1人常駐させることにした。
言葉は通じないが多分どうにかなるだろう。

後日オークションで出品された闇絹は、やはりすごい値段が付けられた。
これでダークエルフの食卓は改善されるし、この心地よい服の感触を楽しめる人も増えていくだろうと思った。

闇絹だけでも十分通貨は稼げそうだったが、せっかく強い魔力をもった種族だから、
＜造幣機械＞を設置してあげた。
これにより、運賃程度は楽に稼げるから、気軽に電車を利用できるだろう。

後日、人間に魔法を普及させるために駅に設置した無料の魔法屋、
＜小さな火＞ＭＰ３の魔法石に並んでいるダークエルフを見かけた。
何の対価もなしに新しい魔法を習得できるなんてすごい！と言っていた。

それから暫らくしてダークエルフの村はどう変化しただろうと、久しぶりに訪れてみたら、
駅の地下道と、もともとあったらしい大きな地下広場が接続されていた。
東側の少ない集落に属する小さな地下広場とも接続されている。

地下街の天井は高く空気はひんやりしている。
ヒカリゴケを上手く張り巡らされており、足元も十分見える明るさを確保していた。

地下の広場からそれぞれダークエルフの家と出入りでき、木製の扉で区切られていた。
もともと地下街はそれほど広くなかったのだが、ドワーフの良質な道具が手に入った為に
拡張工事を行ったらしい。

駅の地下道から地下広場に地下街、そしてひときわ大きな扉の先が、
例のでかいミミズやらが出没する地下洞窟が続いているらしい。

それよりも少し手前の公共スペースらしい扉で区切られていない部屋で、地下水がわき出ている。
腰の高さで水が一端溜まるようになっている。
そして、あふれ出た水が足元の池に流れ込んでいる。

そこに洞窟エビが数匹飼われていた。
食べ物に余裕ができたので、すぐに食べたりせずに増やそうとしているらしい。

洞窟探索の比重を減らし、闇蚕と闇絹の生産の人数を増やしたらしい。
飼育場を拡張したようだ。

いろいろ案内してくれるのはダークエルフの長の美しい女性だった。
彼女は正平に感謝をしてもしきれないといった風である。

正平も闇絹の服がとても気に行ったので、こちらもありがたいということを伝えた。
村の変化をいろいろ聞いた後、ふとダークエルフからも近衛を付けたいという提案が出された。

案の定、正平と見た目が同じような年齢の絶世の美少女ダークエルフが付けられた。
いつの間にか美女の近衛を付けるのがデフォになっていた。

やんわり断ろうとしたのだが非常に悲しい目をしてこっちを見るので、快く受け入れることにした。
別に美少女が嫌いなわけでもない。ちょっと恥ずかしいと思っただけである。
あんまりそればっかり増えるのもどうかなあと考えていただけだ。

新しい近衛の美少女ダークエルフの名前は、ジェリカと名付けた。
エルフ同様発音不可能な名前だった為に、聞き取れた音を拾って再構築した名だ。
元の名前とかなり近い為か、正平が付けた名前だからかすごく気に

いってくれた。

ジェリカは妙に人懐っこく、たびたび後ろから抱きついてきた。
エルフのニエルも同じように抱きつくようになってしまった。
いままでそういう行動はとらなかったのに。

ドワーフのケットは相変わらず座っていると膝の上に乗っかってくる。
常に平静なのは人間のジェシーぐらいかもしれない。

ふと、連れてきた人間を取り巻く環境を考えてみる。
家畜の消費をなるべく抑えていたとはいえ、
毎日多くて1食、下手すると食べられないような人もいたのに
いつの間にか、食糧を他の種族に提供できるようになったことに気づいて感慨に浸った。

家畜も消費しつつも頭数はプラスに転じている。
肥やしは近くの畑につかえる。
草原の駅の牧場と畑はかなりの食糧を生み出し始めた。

いい武器が手に入るようになり、探索隊のメンバーもいろんな獣を狩って帰ってくる。
その途中で新しい食物やそのタネも調達してくるという働きっぷり。

稲穂の駅では田んぼを整備し、原生していた稲っぽい植物をどんどん増やしていく予定だ。
並行して、この実を使ったパンや米やビールなんかを作る研究も始めていく。

走り始めるまでは大変だったが、走り出した今、

放っておいても上手く行きそうな感じがする。

最も大事なのは最初なのだろうと思った。

序盤の幸運、能力、出会いに感謝せずにはいられなかった。

■07　途中下車ぶらり旅■

しばらくは途中下車ぶらり旅を美女近衛と満喫して、
新しいアイデアでも考える事にした。

駅から離れた場所に拠点がぽつぽつ出来始めているらしい。
たまにはそう言うのを見に行くのも悪くないと思い視察に出掛けることにした。

美しい湖の駅は湖の反対側から結構離れた地点で、果物の木が林立する場所が発見され
いくつかは、草原の駅の畑に植えられた。
その地点をそのまま果樹園として整備し、そこに家をたてて管理しているらしい。

駅からその地点までの道は木を切り根っこを掘り、
岩をどけるなどして徐々に整備されてきているようだ。

徒歩では結構な距離があるらしいから、貸し馬車にのってそちらへ向かうことにした。
完璧に整備されているわけではなく、途中大きく迂回して目的地についた。
そこは余計な木は伐採され、程良く策で囲った見事な果樹園が広がっていた。

そこかしこから甘いにおいが漂っている。
エルフと人間が共同で管理しているらしい。
人間の方がくだものを市場へ売りに行き必要なものを買って帰ると

いう。

エルフなのだから<造幣機械>で銅貨を製造しないのか聞いてみたら果樹園の運営や水の調達などに魔法を使用しているとのこと。
販売する果物で十分ＭＰ通貨が稼げるのでその必要もないという。

なるほどなーと感心していたら、好きにもいで食べて欲しいと言われる。
正平も近衛も思い思いに果物を選び食べた。
現生種だから酸っぱいく薄い味かと思ったが、濃厚で甘い果物だった。

なんでもエルフ秘伝の魔法によって品質を上手く管理しているらしい。
感心したので、ＭＰ通貨を払った。
正平達は満足したので駅まで戻った。

路線により行動範囲が広がり市場により必要なものが調達しやすくなる事で
こういった僻地の管理も容易になってくる。
市場と電車が好効果を発揮しているのを実感した。

次に久しぶりに温泉へ行く事にした。
草原の駅で降り、海の逆側へ行く。
利用者が多いので、馬車や人力車がわりと頻繁に出ている。

ちなみにこの車輪の構造もエルフ、ドワーフ、人間の協力により実現したものだ。
すでに概念として持っている人間の知恵に、ドワーフやエルフの技術が注がれることで出来たもの。

利用者が多いので道はほぼ整備が終わっているといえる。
ほとんど温泉地へ一直線で進み、弾に茶屋のような店が出ている。
遠方ではあるが、歩いて通う人もちらほら見かけた。
しばらくして温泉地に着いた。

なかなか奇麗に整備されており、土産物屋まで存在する。
オークションで鶏を購入したオーナーがここで育て増やしているらしく、
それらの産んだ卵を温泉卵にして売り出していた。

なんとも日本人らしい発想である。
将来的に温泉まんじゅうも売り出したいらしい。

近くに清水が流れているらしく、飲み水や小魚を調達することができる。
自給自足とまではいかないが、かなりの物が現地で調達できるようになってきているらしい。
遠隔地だからなるべく補給が少なく済むように整備を進めているとのことだった。
数日かに一回、第二草原に大量に買い付けに行くらしい。

温泉地らしい風景に郷愁の念を感じた。
もちろん温泉にも入ることにした。

オーナーはＶＩＰ用の個室温泉も用意してあるから、皆さんと一緒にどうと聞いてきた。
さすがに余計なお世話だったので、丁重にお断りして、それぞれの性別の風呂場に入って行った。

風呂屋もいいがやはり温泉は格別だった。
見える景色も美しく、魔法を使って擦り切れた精神を癒すには持ってこいだと思った。

どうやったのか冷たい果汁を絞った飲み物が売られており、
近衛と合流したあとにみんなの分を購入して一緒に飲んだ。
名物の温泉卵も購入しみんなで味わった。

夕闇に包まれていたので、駅まで戻らずに泊って行くことにした。
宿泊施設もしっかりしており、ちゃんとした食事を出してくれる。
すでに完璧な温泉宿を実現している。

建物はまだまだ簡素な作りだが、それをチープと感じさせないセンスがある。
今回に限ったことではなく部屋は近衛達といっしょである。
わいわい騒ぎ疲れてみんな眠った。

翌朝霧靄がつつむなか、もう一度温泉に入り、朝食をとって駅まで戻った。
宿にしてもそうだが、どこの店でも正平とその一行に対しては
無料で何でも提供しようとする。

その心遣いは嬉しいのだが、正平は規格外の魔力を所持しており、
いくらでもＭＰ通貨が払えるし
素晴らしい商品、サービスに対してむしろ余計に払いたい気持ちなのだ。
結局一般的な値段をしっかり払うということに落ち着く。

少なくとも正平が関わった人々はおおむねこの世界を気にいってくれているようだ。

正平自身も幾分不便になったとは思うが、それでもかつての地球よりもいい感じではないかと思っていた。
何気にそう思い始めている地球出身の人間も少なくは無いようだった。

駅までついたら、その反対側へ行き、徐々に規模が拡大されつつある河岸へ行き、その後塩田を視察した。
石造りの簡易な港と、小舟が並び、エルフ製の投網が配備されている。
まだまだ近場での漁になるのだろうが、釣り竿に銛に仕掛け網と多岐にわたっている。

養殖する計画なんていうのもあるらしい。
５人は船を借りて少し沖まで漕いでみた。
海水は暖かく、心地いい風が肌をくすぐる。

そして、黒塗りの専用車両に戻ってきた。
正平の家族には既に屋敷が用意されてメイドが雇われている。
しかし、正平にとっては、こっちが家であり拠点であった。
この車両の内装はいまだ全て建築物の中で最も高級感溢れている。

たまに一般車両に乗ってみる。
乗車率は４０～９０％ぐらいだろうか。
正平に気付くとだれもがほほ笑みかけてくれる。

枯れた植物で編まれた手提げ袋を持っている人をちらほら見かける。
最近の人気商品らしい。
購入したであろういろんな小物や食糧が詰め込まれている。
なんとなくエルフが作ったものかと思ったら人間が作っているらしかった。

目を輝かせて外の景色を眺めるダークエルフの兄妹がいる。
なんでもずっと乗りっぱなしで折り返してきたらしい。
キセルっぽかったけど今の乗車賃は距離に関わらず一律なので不問にした。

列車に関していろいろ質問された。
ずっと尊敬のまなざしを向けられていたが、
まだまだ路線を伸ばしていくと言った時のまなざしは、強すぎて思わず苦笑いする程。

■08　ゴーレムの街■

ダークエルフも馴染んできたと判断した正平は、さらに路線を伸ばすことにした。
専用列車に乗り換え、ダークエルフ街まで向かう。
ジェシーと新たに加わった近衛も既に乗りこんでいる。

４人の女性近衛もこの専用列車を拠点に活動している。
と言っても、正平に侍っているだけで、たまに正平のお使いをこなすぐらいである。
その他の９人の近衛達は、みんな街の発展や維持に自ら取り組んでいる。

ダークエルフ街の駅までしか列車は走らせていないが、その先もまだ線路が続いていた。
以前＜レール・顕現＞ＭＰ２５を使った時点でこれよりも先まで延ばしていたのだ。

正平と近衛以外が載る事のないこの黒塗りの車両を見かけたダークエルフ達は、
こちらに手を振ってくれる。
それを嬉しそうに返すダークエルフの近衛ジェリカ。

ダークエルフ街の駅を越えてすぐに草地は無くなり、乾いた土に岩盤という緑の少ない景色に変わった。
真っ平らだった大地も徐々に隆起した岩が目立ち始める。
忽然と現れた大きな岩の前で線路は終わっていた。

正平は一度列車からおり、そこから＜レール・顕現＞ＭＰ２５を発

動した。
線路の前方の岩は消滅し、線路の続きが伸び始めた。
＜レール・顕現＞ＭＰ２５は、岩盤だろうと何もない空間だろうと水や溶岩の中だろうと、
問題なく列車を運ぶことを可能とする線路が出現する。

この魔法が発動しているところを初めて見る新参の近衛は、
この異常な光景に正平の魔法に底知れなさを感じた。

延長された線路を進むと、人型の岩をちらほら見かけるようになった。
大きな洞穴の入り口にそれがたくさんたむろしているのを見かけた。

しばらく進むと、人工物らしき砦のような建物を発見する。
そして周りで人間が農作業をしている姿が見受けられる。
早速その場所に駅を作り、人間に話かける。

彼らは人間ではなく何者かに作られたゴーレムだという。
ゴーレムを統括する者もまたゴーレムで、人間の若い男の姿をしていた。

ゴーレムは絶滅の危機に瀕しているらしく、保持するＭＰが消えると元の素材に戻り
二度とゴーレムとして活動できなくなるらしい。
男はゴーレムを作ったという者の命令でゴーレム達を維持することを命じられていた。

ゴーレム達は自ら唯一使える魔法、＜人造生命延長＞ＭＰ１でその仮初の生命を維持している。
しかし、仮初の生命である為かＭＰが自動回復するようなことはな

い。
そのため魔力を外部から摂取する必要があるという。
育てているものはカミキリ草という植物で、
育てたその草を直接生物に植え込むことで魔力の塊でできた実をつけるという。

これを聞いた一行は非常に嫌な予感がした。

その現場では予想通り、体からカミソリ草が直接生えた人型が捕らえられていた。
ほとんどがダークエルフで、初めて見る獣人種という種族もいた。
みな服を纏っておらず、うつろな瞳でこちらに視線を向ける。

近衛達は蒼白になる。
ダークエルフのジェリカは悲鳴をあげた。
ダークエルフの街で聞いた紛争とはこの事かもしれない。

案内するゴーレムは、カミソリ草に実る＜魔力丸＞は魔力の結晶だと言う。
回復量は、ＭＰ１～５程度。
苗床にする生物の魔力が高いほど実りやすく魔力の値も大きいらしい。

獣人種は３日に１粒で回復量はＭＰ１～３程度、
ダークエルフは毎日２～５粒つけ、回復量はＭＰ２～５程度だという。

＜人造生命延長＞ＭＰ１で１週間ぐらい延命し重ねがけもできる魔法であるが、

それが維持出来ずにゴーレムの人口はかなり減っているらしい。
苗床にするダークエルフ達も塒(ねぐら)から外へ出なくなり、捕らえ辛くなってきているという。

他の生物でも試しているらしいが、魔力丸の質も収穫量も良くなく直に死んでしまうという。
ダークエルフは比較的長持ちするようで、
死ぬ前に逃がして個体数が減らないようにしているらしい。

正平は隣をみると、ダークエルフのジェリカが訴えるような瞳をこちらに向けてくる。
ジェリカは正平に眷族を助けて欲しいと願う。

ふと思いついた正平は、ズボンから金貨（５００ＭＰ通貨）を取り出す。
それを案内のゴーレムに突き出し食べるように促す。

突き出されたゴーレムは、それを受け取る。
それが何で出来ているのかすぐに理解した。魔力である。
極上の芳香を放っているかのように感じた。
ゴーレムは、まどろんだような表情を見せ、それを口に入れる。

カサカサだった肌は淡い光を放ち瑞々しくそして美しく変化する。
枝毛の目立つ髪の毛もいつの間にか艶やかになっていた。
無生物という感じが強かったが、今は完全に生物と見分けがつかない。

ゴーレムはかつてこれほどの魔力を得た事は無かった。
そのゴーレムは正平に新しい主になって欲しいと懇願する。
正平はそれを承諾し、まずはとらわれている亜人種を開放させるこ

とにする。

正平は＜治療＞ＭＰ５０を発動させる。
カミキリ草はそのまま枯れ捕らえられたダークエルフのうつろな瞳に光が戻る。
そしてゴーレムに鎖をはずさせる。

その場の全員を開放させ、＜治療＞ＭＰ５０を施す。
みな一様に感謝し、正平が何者か知り崇拝した。
ジェリカも同じような気持ちを正平に持った。

ゴーレムは２種類存在し、見た目がほとんど人間と変わらないフィギュア種と
３ｍぐらいの巨体を持ち岩でできたマテリアル種がいる。

どちらも自身を維持するのに魔力の塊が必要だという。
姿は変わらず、ＭＰの回復はしない半面ほとんど無限にＭＰをストックできるという。
使える魔法は、＜人造生命延長＞ＭＰ１のみで、
フィギュア種の一部が＜魔力譲渡＞ＭＰ１を使えるらしい。

まだ生命を持っている全てのゴーレムを集めた。
すべてぎりぎりの魔力しか持っていない。
マテリアル種は今にも崩れそうで、フィギュア種は、使い古された人形のようだ。

専用列車に積まれた大量の銀貨（５０ＭＰ通貨）を持って来させた。
ゴーレム達を一列に並ばせ１枚ずつ渡す。
全員に渡った後、それを食べるように指示をだす。

途端にゴーレム達を淡い輝きが包む。
ぎちぎちしていたマテリアル種は油を差したかのように滑らかな動きになり、
岩を適当に削って人型に近づけたような外見も、体の大きな人間に岩の鎧を貼り付けたような姿に変わっていた。
声を発することはできないらしいが、感謝の念は伝わってくる。

フィギュア種もみんな瑞々しさを取り戻し、生命力を主張するかのようなオーラが漂っている。
こちらはちゃんと喋れる事ができ、正平にはその意味ははっきり理解できる。
総じて感謝と尊敬、そしてその膨大な魔力に対する敬意である。

ゴーレム達は正平を新しい盟主と仰いだが、正平はふと思いつき首を振る。

正平は、商業とゴーレムの協力な労働力でＭＰ通貨を得る事が出来ると言う。
そして、これまでにやってきたことをゴーレム達に教える。

ゴーレム達はもちろん、隣で聞いていた開放された者達もそれを聞いて、
正平の英知に驚く。

開放されたダークエルフの１人が、自分の眷族にもこの事を伝え、洞窟で隠れているダークエルフ達を正平の庇護に加えてほしいと懇願する。
正平は快諾し、そのダークエルフ達が住む洞窟の近くにも駅を作る事にした。

近衛の経緯を聞き終えたゴーレムは、案の定ゴーレムからも近衛を付けさせて欲しいと言った。
そして、フィギュア種で見た目が可愛い女の子が選ばれた。

マルチと名乗ったそのゴーレムはフィギュア種でも特異で、身長が６０ｃｍぐらいしかない。
他のゴーレムが人間と大差ない大きさなのにマルチは明らかに人形のようなのだ。
＜魔力譲渡＞ＭＰ１という魔法が使え、魔力が尽きて絶命寸前のゴーレムを見つけては魔力を渡していたという。

次にゴーレムに怯えるダークエルフが隠れている洞穴前まで専用車を走らせる。
マルチと開放されたダークエルフがここだと指し示す。
専用車をとめ正平は徐に＜駅・顕現＞ＭＰ９０００を発動する。

ゴーレムのマルチはその膨大な魔力の奔流に目を細め、うっとりする。
やがて現れた駅。予め聞かされていたダークエルフ達も初めて見る大魔法に目をむき、
いったいどれだけの魔力を使ったら発動できるのか想像できなかった。

９	洞穴前	ダークエルフの隠れ家	人口　６００人程度
１０	ゴーレムの砦	ゴーレムの集落	人口　４００人程度

ダークエルフに案内され洞穴へ入って行く。
門番にマルチを頭に載せる正平に驚き警戒したが、開放されたダー

クエルフが正平を説明する。
門番は恭しく礼を取り、奥へと促す。
内部では傷ついた個体や餓死寸前の個体も散見された。
墓標が数えきれないくらい立ち並ぶ広大な一室もあった。
見かけるダークエルフのほとんどが疲れ切った表情をしており、美しい外見を損なわせていた。
かなり奥まで歩くと何処となく高級感の漂う一室に通された。
身なりのいいダークエルフがいた。ダークエルフ達の王らしい。
王は、囚われていたはずのダークエルフ達が健康な状態で戻ってきた事に驚きつつ喜んで迎えた。
そして戻ってきたダークエルフ達は臣下の礼をとり次に王に正平を紹介する。
正平が何者であるか知った王は、自ら座っていた席を立ちそこへ座るように正平を促す。
正平は苦笑しながら遠慮し、ゴーレムがもうダークエルフの敵で無くなった事を伝える。
ダークエルフの王も、にわかに信じがたいと言った風だったが、戻ってきたダークエルフ達が、経緯を王に説明した。
王は自ら膝をついて正平の手を取り見上げるようにして感謝を述べた。
それを聞いていた王を守る者達や王族も涙を流して喜んだ。
ダークエルフのジェリカも釣られて涙を流している。
そして正平は南へ逃げだしたダークエルフも正平の連れてきた人間

や他の種族たちと上手くやっていると言った。
ダークエルフの王も正平の築いた支配圏で商業活動をしたいと述べる。
正平は当たり前だというように承諾する。

広大な鍾乳洞の洞穴に住むエルフ達はなんと６００人近くいるらしい。
食糧は蝙蝠や巨大モグラなどろくなものを食べていないようで、外ではゴーレムが待ち構えていた為
洞穴内で取れる僅かな生き物が彼らの生命を繋いでいた。

人数が多すぎる為に全員にいきわたることは無いが、
それでもまずは食事を施したいと思った正平は皆を外に出し、専用車に積んであった食糧を全て開放して
料理を作る指示を出した。

ゴーレムの包囲網の為に外に出るのが初めてという者がほとんどだった。
その為、あまりに巨大で力強い太陽という光源に驚き、目を瞬かせた。
徐々に慣れてくると、外の新鮮な空気を胸いっぱいに吸い気持ちよさそうにしている。

近衛達はさっそく料理に取りかかる。エルフのニエルは正平も知らない魔法を使い、
岩場を整えテーブルのような形に変えていく。
そこへ、最初にできたサラダの山を置いていく。

ダークエルフ達は初めて食べるそれを大変気に行った。
その後もどんどんいろんな食べ物が運ばれてくる。

運ばれたそばから山盛りに盛られた食べ物は消えていく。
その間、正平は瀕死のダークエルフの治療に回っていた。
生きているダークエルフを全て外へ連れてくるように言っておいたのだ。

食事に夢中になるダークエルフ達をよそに王や王女のダークエルフは、
瀕死の者達が＜治療＞ＭＰ５０でみるみる回復する様子を見ていた。
全ての治療を終えた正平は、側で様子をみていたダークエルフの王族達に話しかける。
ここに住むダークエルフはどのような事が出来るのか。
彼らもまた魔力の多い種族だからそれだけでも十分関わって行ける事は予想できたが、
正平は少しでも生活レベルが向上すればいいなと思っていた。

いろいろ話して分かったことは、冷凍系の魔法が得意ということ。
遥か昔、ゴーレムと事を構えるようになるよりも前から伝わっているいくつかの技術。
そのうちの一つに紙の製法があった。

それを聞いた時、正平は生活レベルが一気に上がる予感がした。
冷気によって、食糧の長期保存、紙によって知識の共有、技術の保存、新たな娯楽の創出。

現在かなり優先的して紙作りを進めているのだが、なぜか元の世界と同じ方法が通じない。
木や水の性質が根本的に違うらしい。直に酸化してばらばらになるという。

ダークエルフの技術によると工程の途中で冷気系の魔法が使われている。

材料は当然木が使われており、長らく洞窟で暮らしていた為に、紙が作られる事は無かったが、
貴重な技術であるという事は彼らも認識しており、作る事が可能であるという。

正平は、それを量産し市場に流して欲しいと願う。ついでに冷気系の魔法屋を開いて欲しいとも。
どちらも非常に貴重で有用性の高い技術だが、
王達は正平への恩が少しでも返せ、尚且つ直にでも正平の支配する商業圏に加われることに大きな喜びを感じた。

果物のデザートを運んで近衛の1人をこちらにも持ってこさせるように言った。
それを、王夫婦と王女に勧める。王族なのに生まれて初めて果物の甘さを味わう。
彼らも知識としては、洞窟の外の食べ物を知っていた。

ゴーレム達に対する怨嗟を漏らすが、正平は首を振る。
正平の肩の上で座っているゴーレムのマルチは、申し訳ないと言うように顔を伏せている。
ゴーレム達は二度と襲わないから仲良くして欲しいと正平は言う。
一族の大恩人たる正平の言葉に従うと言った。

ふと、ゴーレムのマルチに聞いてみる。
魔力を抽出固形化する<造幣機械>のようなものは作る事はできなかったのかと。

ゴーレムに限らず恐らくは誰にも作れないと言う。
ドワーフだけがたまたま編み出したドワーフの技術だけが可能とする機械だと言う。

食糧を全てはたいてもまだまだ食べ足りないといった風だ。
列車を大量に作りダイヤも変更し、ここから通えるようにすると皆に告げる。
それに乗って商業地へくると良い。あとの説明はダークエルフの近衛、ジェリカに任せた。

王は、ジェリカがどういう者か聞いてきた。
正平は、自らの側近であらゆることの手助けをする者達であり、全体の事を優先し常に考えられる者達だと説明した。

王は、自らの娘である王女を正平の近衛に入れて欲しいと言った。
正平はいつもの事なので承諾した。
王女の名前は、人間でも発音できるように聞き取れる部分を拾って、アルマーゼと名乗るようにいった。
王女は優しく微笑み了解の意を告げた。

アルマーゼとマルチは握手を交わした。

■09　魔貨■

ジェリカはしばらくの間、ダークエルフの洞穴に待機し、
いろいろ教えるように言い、王の側近として働いてもらうことにした。
ダークエルフの街からも何人かそちらへ行ってもらっている。

ゴーレムの砦へは、近衛の部下の外交担当を送っておいた。
彼らは直に日本語を覚えてくれるから、これまでよりも楽だろう。

間もなく列車に乗ったダークエルフやゴーレムを見かけるようになった。
マテリアル種は大きすぎる為に貨物列車に揺られてやってくる。
時折仕事で得た銅貨を齧るゴーレムを見かける。

第二草原の市場はいよいよ賑やかになってきた。
ゴーレムの労働力は凄まじく、遠方で建設ラッシュが始まった。

正平が街を離れるとその加護が消えて、狂暴な野獣が襲ってくるために
守備兵が組織されて、街の外周部を守っている。
しかし、守り切れるものでは無い為に、溝や壁を徐々に構築しているという。
それが一気に進んだと喜んでいた。
ゴーレム自身も守備兵として活躍する。

草原の駅で開拓中の畑でもその労働力を遺憾なく発揮している。
ゴーレム達もその働きの対価に満足していた。

いくら消耗してもそれを上回る魔力を得ることができる。

人間そっくりのフィギュア種はどうも内に秘める魔力と容姿がある程度比例関係にあるらしく、
初めて見た時とは比べ物にならないほど男女ともに美しく輝いていた。
正平は実際に髪の毛が暗闇でも輝いているところを目撃した。

ゴーレムは魔力を自分で回復出来ない代わりにほとんど無限に魔力を貯める事ができるという。
魔力が直接生命の維持につながるためか本能的に魔力が増える感覚に心地よさを感じるらしい。

それを聞いた正平は、片っ端から得られたＭＰ通貨を食べないで、それを利用してさらに儲ける方法もあると正平は彼らに助言しておいた。

各駅に設置した＜造幣機械＞によってＭＰ通貨がじゃんじゃん増えるだろうと思っていたが、
逆に減っていくかもしれないなあとも思った。
ただ、ゴーレムはこれ以上増えないから、問題無いだろうとも思った。

＜造幣機械＞を利用する人の列が消えることは無いほどの利用率である。
まだまだ大して使い道のないＭＰをそのままお金に変えることができるのだから当然と言えば当然である。

第二草原エリアだけ新たに2機を追加で置くことにした。
商業地は駅から東西に広がっている。

駅から延びる大きな道の中ほどにそれぞれ＜造幣機械＞を設置する為だけの目的で建物をたて、そこに配置する。

これで少しは緩和するだろうと思っていたら、活動拠点から遠いあるいは列が長すぎて並ばなかった層が新たに利用するようになった。

設置した近辺は賑わいを増し、製造した銅貨でそのまま近くで買い物をする人もよく見かける。近くで店舗を構える商人は売り上げが増えたとひそかに喜んでいた。

洞穴を支配していたダークエルフの王族は、さっそく秘伝の魔法で魔法屋を出している。
＜冷気＞ＭＰ４
かなりの冷気を出せる。小さな箱なら冷凍庫と同じ役割を持たせることもできそうだ。
重ねがけすることで密閉空間に大量の食糧を保存できるだろう。

利用料は他の魔法屋と同じぐらいに設定している。
店が開かれるや否や、ものすごい人が詰めかけ我先に＜冷気＞ＭＰ４を習得しようと躍起になっているようだ。
食料品を扱う人々、特に海の駅を拠点にしている人たちに大人気となった。

氷自体これまで一つも手に入ら無かった為に、水を張ったバケツを持ってくるものも結構いた。
ただ、習得するだけというのも勿体ないし、氷は貴重だから当然だろう。
製造した氷をそのまま飲食店に持っていく姿を見かける。

最近分かった事だが、魔法石があればＭＰが足りる限り誰でも魔法が使えるのだが、
習得は人によって出来ないことが判明した。
習得するまでの回数に個人差があるのは分かっていたが、不可能な人がいるのは最近判明した。

最初に公開した魔法は単に人間と相性が良かったのか、習得難度が低かっただけらしい。
大凡（おおよそ）２０回越えて習得できない場合はほぼ不可能っぽかった。

後で分かることだが、＜冷気＞ＭＰ４はかなり人を選ぶ難易度が高めの魔法だった。
ちなみに正平は3回で習得してしまった。

その日たまたま自ら出店した魔法屋を見に来たダークエルフの王と会った正平に
やっと王らしい生活が出来そうだと笑いながら話しかけてきた。
王はこの街に別荘を建てる予定だと言う。

他にも紙の製造が始まっているという。市場で必要な道具は直に揃える事が出来た。
これはかなりすごいことだとダークエルフの王は言う。
間もなく出来あがった紙の束がオークションに出品される。

それまで羊皮紙しかなく、それに比べて厚みがほとんど無い見た目も美しい紙は
かつて出品され最高額をつけた＜微消毒＞ＭＰ１に次いで２番目の値段が付けられた。
おおよそ相場を理解してきたダークエルフ達はこれには大変驚いた。

紙を早く利用したい商人はたくさんいた。この世界にやってきた人間の技術者や知識層も
この世界に持ち込む事が出来た唯一のモノである知識を書物に残したくてうずうずしていた。
正平もかつての世界で読書が好きだったので、紙を大量生産させて図書館でも作りたいなと思っていた。

その様子を見ていた聡いドワーフの商人は、仲間に文房具の製作を依頼した。
これまで羊皮紙や木版を利用していた為にそれなりに売れていたが、紙の普及で一気に需要が高まると読んだのだ。

他にも重要な商品を市場に齎していた。
それは綿である。アオイ科の多年草から取れることが知られているが、
この世界でも似たような植物があるらしい。

エルフやドワーフや野生の動物の毛や皮で衣類を製作しており、
ダークエルフは闇蚕を飼い闇絹で服を作っていた。
そのどれとも素材の違う服をゴーレム達は着ていた。
その事を肩に座っているマルチに聞いてみたところ、
この綿から作ったものを纏っていたらしい。

カミキリ草と同じようにゴーレム達は育てていたとの事。
正平は、これは大きな商売になるからと商品にするように言った。

まだまだ1人何着も服を持てない状態である。
その理由は、羊の毛以外服の材料がそうそう手に入らない為である。
近衛達は着る物には困っていないがそれでもいろんな服が出るのは大歓迎であった。

今回の路線延長で新たにふえたモノは、ゴーレムから綿と重機の様な労働力。
洞窟のダークエルフからは、冷気に紙。
線路を延ばしていけばどんどん技術やモノが増えていくのだろうかと正平は考えた。
秩序が破綻しない程度の速度でこれからも徐々に伸ばしていく予定である。

銀行で預かり証書の需要が増えてきている。
これは、５００ＭＰ通貨の金貨でもかなり嵩張ってしまい
たとえ手数料を取られてもいつでも銀行で下ろせる証書は便利だからだという。

しかし、証書を乱発して管理が大変そうなので、それを軽減することも必要だと感じた。
そして正平はとうとう５０００ＭＰ通貨を製作しようと考える。

今現在ある特別性の＜造幣機械＞でも５００ＭＰ通貨が限界である。
さっそくドワーフの街を尋ねてみた。
＜造幣機械＞作ったドワーフは流石に同じ大きさでその魔力を詰め込むのは無理だと言った。

しかし、正平としては銅貨から金貨まで大きさを統一していたので、５０００ＭＰ通貨も同じ大きさにすることは譲れない一線だった。
あと、どんな見た目の材質になるのかも興味があった。

それを聞いていたドワーフの長は、最近発見された魔石を持ってきた。
これを材料にすれば作れるかもしれないと。

なにやら金属関係の魔法を生み出すのに非常に良さそうな波動を感じるとのこと。

正平はその魔石を見た瞬間なにかインスピレーションが湧いた。
正平はそれを買い取りたいと長に申し出た。
超貴重品である魔法石の原料である魔石は、
同種族以外に譲渡するのはそうそう出来る事ではないのだが、正平の頼みならと快く承諾してくれる。

正平自身もそれを理解しているため、普段はそういった頼みごとは控えるようにしている。
しかし、今回はこれですぐ解決するような気がした。

魔石を受け取り、魔力を手に込める。
暗い坑道内が太陽に照らされるかのような光で溢れる。
魔石は膨大な魔力を浴びて、やがて魔法石へとその姿を変える。

正平の掌に残ったモノは青白く透き通るタカラガイの形をした宝石だった。
＜魔貨製造＞ＭＰ５５００
魔法石はどれも例外なく美しい宝石だが、正平が作ったモノは格が違った。

さっそく正平はそれを媒介に新たな魔法＜魔貨製造＞ＭＰ５５００を発動する。
目の前に魔力が放出されそして集約していく。
光が収まり現れたのは見事な貨幣である。

表には正平が乗る特別車両の図柄、裏にはＭＰ５０００の文字。
これまでの貨幣と同じ大きさだが、不思議な存在感があり青白い輝

きを放っている。
見事な造形でたとえ魔力を有していなく、又通貨と定めていなかったとしても普通に金貨の１０倍以上の価値はありそうだった。
このＭＰ５０００通貨を魔法名からそのままとって魔貨と名付けた。
この初めて造られたＭＰ５０００通貨をドワーフの長へ渡す。
魔石の代金の一部として渡し、あといくら欲しいか聞いてみた。
しかし、ドワーフの長はこれが単純な貨幣としての価値以上の効果に気付いた。
その凝縮された魔力の塊は所持する者の身体能力の全てを僅かに引き上げ、
野獣に畏怖を与えるというマジックアイテムのような効果が宿っていたのだ。
長はもうこれで十分とあわてて断り、ＭＰ５０００通貨をドワーフの宝にすると言った。
もっと作って市場に流通させるつもりだった正平は流石に大げさだと思った。
しかし、周りのみんなもその貨幣を羨ましそうに眺めていた。
ドワーフの長がその魔貨の秘めた恐るべき効果を指摘した。
それを聞いて驚いた正平はそれならば、と近衛全員に渡すことに決めた。
正平は調子にのって＜魔貨製造＞ＭＰ５５００で７０枚の魔貨を造り出した。
使った魔力が膨大すぎて流石の正平も強烈な精神の苦しみを味わった。

まずはいつも付き従う近衛達に、
次いで街のあちこちで働いている人間の近衛達へ魔貨を１枚ずつ渡していった。

女の子の近衛達は、指輪をプレゼントされるかのように恭しくそれを受け取ると、
恍惚とした表情でそれを眺めている。
ゴーレムのマルチはそれを食べて己の魔力としようか大切に持っておこうかものすごく悩んでいた。

街で活動している近衛の場所を聞き、いちいちそこへ足を運ぶ。
持っているだけで効果があると教えて、ボーナスだと適当な理由で渡した。
受け取った近衛達は感激し、中にはうれし涙を流す者もいた。

近衛達は謙虚にも街の維持に必要な資金と給料は分けているらしい。
給料は常識的なもので自らの浪費を経費のように扱ったりはしないそうだ。

残りは全て銀行へ持っていき、資金の預け証書を発行する前にこちらを進めるように指示した。
次の日、結構な量が魔貨に換金されて受け取った商人はそのあまりの出来に感心しきりだったという。

すぐに銀行のストックが無くなり、魔貨はＭＰ５０００以上のレートで取引され始めた。
それは正平の本来の意図と違うものである。
なぜか意地になった正平は、精神の疲労に苦しみながらも何度も大量のＭＰを消費して魔貨を補充し続けた。

商人の間で魔貨を所持するのが一つのステータスとなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9824z/

新世界の車窓から

2012年1月9日06時42分発行